
裸の王子さま

及川葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裸の王子さま

【Nコード】

N1178L

【作者名】

及川葉月

【あらすじ】

寂れた商店街で一際目立つ「Cafe・ROMANCE」を営む我が侘・見栄っ張り・傍若無人の三拍子が揃った安座間美咲。彼の下で店の店長として働く舞川依來。そんな二人のいる店にバイトで入った徳澤直美。経営者と店長の関係、依來が隠していること。美咲の生い立ち。それが明かされたとき二人の関係は。

手紙

謹啓 弥生の空美しく晴れ渡り、あなた様におかれましてはますますご清祥のことと拝察いたしております。さて、明日くらいに届くあなたへの贈り物のことです。あなたの追ってらっしゃる不良債権の息子です。その息子さんのことを簡単に紹介しますと、年齢は十八歳で最終学歴は中卒。便宜的に言えば馬鹿です。敗者であり、貴族という名の引きこもり。コミュニケーション能力の乏しさはあなたに勝ります。ただ語弊がありますが、非常識だとか、宇宙人と交信するなど、勘に障る馬鹿ではないです。勉強が出来ない馬鹿なので日本語は通じますし、常識もあります。そしてなによりビツクリするくらい顔の綺麗な子です。だから私としては彼を芸能界にぶち込んで一気にスターダムに乗せた拳句、男色を金持ちの道楽だと勘違いしている政界の重鎮の愛人にして荒稼ぎしようと思ったのですが、あなたの目論見を考えるとそうはいかないので妄想に留めておきます。

もう一度確認しますが彼は男です。あなたと同性です。妙な趣味に目覚めて男色になるというのもアリです。正直、私が男でも彼なら抱けると断言出来て冷や冷やしています。私があと三十歳くらい若かったら彼をあなたに渡さずに自分の手元においていたでしょうね。まあそんな話じゃないのですが、それくらい恵まれた外観の持ち主です。ちよつと性格に難ありと申しましょうか、あなたみたいに身勝手に人のことに無頓着で、好きな言葉は？ と聞かれて「差別用語」と答える人間に心を開くというのは困難で不可能です。個人的には心開かせる前に股開いてもらった方が良いと思います。そしてその先にある禁断の快樂でも貪ってみたらどうですか。正直、あなただって抱けるなら女でも男でもどっちでも良いんじゃないですか？

桃の節句も過ぎすっかり春めいてきましたが、油断なさらずに健康には充分お気をつけ下さい。 敬具

平成 ××年 三月 十三日

藤井 リオナ

カフェ・ロマンス 経営者様

追伸

「IKEA」はアゼルバイジャンではなくスウェーデンの会社であり、あなたの発音は英語圏よりです。日本語の発音はドイツ語圏と同じ「イケア」です。

ココだけの話。

イケアの家具を大量に買ったために、不要になった家具を捨てようとして壁際においていたキャビネットを移動させたとき、粒子のような埃をかぶった手紙が落ちていたことに気付いた経営者は、翌日、自身が経営するカフェ・ロマンスの自分の許可なしに立ち入ることは許されない一室でそれを読んでいた。

届いたのは丁度二年前。わざわざ宛名の横に「親展」と脇付けしているあたりが、どうも怪しい手紙だ。

経営者はその手紙を脚の低いガラステーブルに放置し、ソファにふんぞり返って腕を頭上に伸ばした。背筋を痛々しいくらいバキバキ鳴らして鼻から空気を吸い込み、肺に酸素を送る。

平日の午後。閑散とした殺風景なこの一室にあるのは、世界シェア八十%を誇る日本製のエアコンと、窓辺に背を向けて置かれた業務用の机。そして経営者が座っている革張りのソファと、コーヒーテーブル。それを挟んだ向かい側に同じく革張りのラブシートが置かれている。

事務所とも応接室ともいえるこの一室で、経営者はデザイン性を重視したノータックの細身のスラックスに、裏地がパイソン柄の背広を上下セットにしたブラックスーツに身を包んで人を待っていた。齢二十四歳と未だ若者気取っていられる年頃もあってか、奇抜な髪形をした茶髪、耳、鼻、眉尻にあけたピアスがどう見ても一般的にスーツを着て仕事をする人には見えない。

背広の内ポケットから、黄色と黒と虎の勲章が特徴である球団の

ライターを取り出し、スペイン産の煙草、フォルトユナを取り出して一本火をつけた。紫煙を吐き、天井を見上げていると経営者が背を向けている扉がノックされた。経営者はふんぞり返らせた体を起こし、扉に向いて「どうぞ」と返事する。

開けたのは、カフェ・ロマンスの全体を統括する店長の舞川まいかわ依來いくだった。

白のワイシャツに、黒のスラックスまでは経営者と似たような格好だが、ギャルソンエプロンを腰にまとい、長身ながらも細身の外観は街中を歩けば十人中十人が振り返るほどの美貌と気品を兼ね備えている。

「なんだ、お前か」

ぞんざいな言葉を連ねて前を向きなおした経営者は啜っていた煙草を利き手の指に挟み、テーブルの端にあったガラス製の灰皿を手元に寄せ、そこに灰を落とした。

「未だ来てないのか」

「一応、事前に履歴書は郵送してもらったんですが」

そう言って依來は経営者の横に立ち、手にしていた三つ折の履歴書を手渡した。鬱陶しいくらいに副流煙を放っていることに気付いていない経営者は眉間に皺を寄せ、履歴書を確認する。

「徳澤直美。とくさわ？ とくざわじゃなくて？」

名前の振り仮名をうつ欄に突っかかる経営者に依來が、みたいですなえ。と訛った語尾で相槌を打った。

「おれ絶対、とくざわさんって呼んじゃう自信あるんだけど」

それはあんたのさじ加減じゃないのかと思ったが口には出さなかった。

「それにしても写真写りの良い子だな。証明写真って大体誰が撮っても三割り増ブスに映るんだけど」

徳澤直美は、どこことなく小動物っぽい顔立ちをしていた。確かに経営者が言った通り可愛らしくて写真写りが良い。だが依來はそれに対して特に返答をしなかった。

ふと経営者から視線を外した依來が目に残めたのは、テーブルに放置されたままの手紙だった。おそらく三つ折りにされていただろう一枚の便箋が、コの字形に不自然なまま折れ曲がっている。

「手紙ですか？」

「藤井さんから。お前も知ってるだろ」

推定戦前（第二次世界大戦）生まれの年増。と付け加えると、依來は、ああ。とその人物を思い出したようだ。

「なんて書いてあったんですか？」

「暴言と予言」

暴言はなんとなく想像つくが予言が何を言われたのか全く検討がつかない。

短くなつた煙草を灰皿にもみ消した経営者は、背広の内ポケットから今度は海外製のタブレットを取り出した。それを、手を介さずのケースそのまま口につけ、一気に何十粒の錠菓を口の中に流し込む。バリバリと噛み砕く音からして十粒以上食べたんじゃないだろうか。

「からくないんですか？」と依來。

「これくらい食べなきゃ煙草の口臭って消えないんだよ」

そう言つて立ち上がった経営者は、窓際のデスクに移動し、徐にしゃがみ込んで三段目の引き出しから、難波のマツモトキヨシで大量買ひした無香料のデオドラントスプレーを取り出し、それをスーツに向けて噴射していた。

スプレー缶を床に置き、引き出しのドアの開けっ放しでその場を離れた経営者はソファに腰を掛け、ふんぞり返つた。左手首に装着しているブルガリの四十万以上する時計を確認し、もう来るんじゃないのか。と依來に聞く。短針はローマ数字の「？」に差し掛かりそうだった。

「あ、本当ですね」

そう言つて依來は「じゃあ、失礼します」と残し、応接室を出た。

telephone

経営者のいる地下室を出た依來は十四階段を上がり、直ぐ手前にあるドアを開けて更衣室に出た。そこにはカフェ・ロマンスで働く従業員のロッカーが壁際に並んでいるが、今のところ四つしかなく、内一つしか使われていない。

今は依來一人が店を持っているようなもので、今は午後のダイナーに向けて準備中の看板を掲げ、店内には誰もいない。一応、これから来る徳澤直美には事前に「準備中の表札が出るけど気にしないでドア開けて下さい」と伝えているようだが。

指定した十五時二十分まであと二十分ある。常識のある人間ならあと十五分以内に来るはずだが、待っている人間にとってその十五分は酷く長い。

依來は更衣室を出て隣接する厨房に入り、そこから誰もいないフロアに出て御影石で出来た床を、アイボリーの壁に立てかけていたモップで磨き始めた。

経営者に「新しいやつ買ったからあげる」と言われて譲り受けたシヤネルの腕時計を病的なまでに一分、二分間隔で確認しながら掃除をしていると、厨房とフロアを区切るカウンターに置かれた電話が鳴り響いた。モップをテーブルに立てかけ、カウンターに駆け寄って表示されている番号を確認すると「内線」とあった。経営者だ。

「はい」

「徳澤さんごつちに寄越したら、お前ちよつと薬局行ってくんない

「？」

「薬局ですか？」

「近所にスギ薬局あるだろ」

依來の脳内に店を軸とした近辺の風景が浮かび上がる。この店は商店街の丁度ど真ん中に鎮座しており、最寄り駅に近い方の出口へ向かって進むと、その最寄り駅界隈に去年コクミンからスギ薬局に微妙な変貌を遂げた店舗があった。

それを思い出した依來は、ああ。と唸り、なに買うんですかと尋ねながら受話器を肩で挟んで自由の利く手でメモ帳とペンと取り出した。

「ヴィダルの詰め替え用シャンプーとリンスと、水と、雪肌精の化粧水。大きい方ね。あと乳液と美容液、それからコンドーム」

雪肌精と書いていたシャーペンの芯が折れた。

「最後のは……」

「昨日使い切ったから。忘れんなよ」

どっちにしる出資は経営者だ。従って依來は最後の品を殴り書きし、後で買ってきます。と承諾するしかなかった。

経営者は軽快な口調で、よろしくー。と言って電話を切った。

依來は受話器を置き、再び掃除に戻った。

没意思(つまらない)。

長針の先が「？」を過ぎたとき、背中にドアが開閉したときに鳴るような仕掛けられている鈴の音が届いた。振り返るとそこにはさつき履歴書に添付されていた顔写真と同じ顔をした小柄な女性、徳澤直美がおおずとした態度で店に入って来ていた。

シャツの上から灰色のパーカを羽織り、下はジーンズ。足元は素足にサンダルと、至って普通の格好だった。顔は履歴書に映っている顔よりも可愛く見える。あれほどの写りを博しておりながら個人的には三割り増しブスに写っていたということか。

「あの、面接に来ました。徳澤です」

緊張しているのか、微かに震えた声で直美がそう言うと、依來はふと口の端を上げ、わざわざすみません。と、取り敢えずモップを壁に立てかけて、彼女を引いた椅子に座らせた。

「少々、こちらでお待ちになって下さい」

そう言って依來は一度、厨房に入り、そこから更衣室に入った。ロッカーをあけ、その中に置いていた茶封筒を手にとって扉を閉める。経営者に預かっているものらしい。

そのあとまた直美を待たせているフロアに戻り、「電車ですよね？」と直美に確認を取りながら、その手に持っている茶封筒を手渡した。徐に受け取った直美はそれを訝しげな表情で眺める。

「一応、今日の分の交通費渡しておきます」

バイトの面接でそこまでは聞いたことがない。

礼を言うのもなんか違うような気もする直美が、どう反応しようか迷っているところ、依来は「事務所で経営者が待つてるんで、そこで面接になります」と言い、直美が腰に掛けている椅子を引いた。直美は、はあ……。と消え入りそうな返事をし、依来の案内によって事務所の手前まで来た。

「それじゃあ、僕はこれで」

そう言って依来は階段を上がって行った。特になんてことないオレンジ色の照明が明るい階段だが、一人になれば不気味だった。

目の前にある木目調の扉を二回ノックした。ドアの向こうから「どうぞ」と低いハリのある若い男の声がする。経営者なんていうから五十、八十の地井武男みたいな男性が待っているのかと思っただが、ドアを開けてみれば、そこには真ん中のソファにふんぞり返って座っている、どう見ても二十代前半の若い男がいた。

「徳澤直美さん？」

こちらに背を向けて座っていたのを振り返ってこっちを見る辛い体勢をしたまま、男がそう聞く。戸惑いながらも短い返事をした直美は、そこ座って。と奴さんが指差す、コーヒーターブルを挟んだ向かいのラブシートに移動し、腰を下ろした。

前を向きなおして自分と向かい合うその男は、髪の色は限りなく金髪に近い茶髪と、切れ長の少し垂れ気味の眠たそうな印象大きな目、筋の通った鼻で、見た目の標準値は大きく上回っていた。

「じゃあ、むしろ面接をせめてもぶらぶらする」

面接

「じゃあ、さっそく面接させてもらいます。うちのこと聞いてます？」

今まで受けてきた面接といえば向こうも自分も背筋を伸ばし、毅然とした態度で行われるものだった。しかし今行われようとしている面接は、目の前の男は脚を組み、ふんぞり返って肘掛に肘をついて頬杖しているという、なめた態度だった。直美の緊張は緩和するどころか猜疑心さえ生まれる。本当にこいつが経営者なのか？

「詳しくは聞いてないんですけど、大体聞いてます」

「えー……と、蛭原と同じ大学の子？」

そう言っただけで経営者はテーブルにおいていた直美の履歴書を見ながらそう聞いた。しかし見ているのは趣味・特技、志望動機が書かれている項目で、直美が在学している大学名が記載されているのを見えない裏側である。果たして履歴書は必要なのか？ 直美は目の前の男が店の経済状況を本当に把握しているのか、疑心暗鬼になった。

「大学は違うんですけど、蛭原さんに聞いて来ました」

「あっそ」

聞いておきながら等閑な返事をする経営者は履歴書をまたテーブルに置き、煙草吸って良い？ とケツに疑問符つけておきながら既に背広の内ポケットから煙草を取り出し、一本抜き出して口に啜え

て火をひつけていた。直美は何も言っていない。

「すぐ来れる？」

「はい。大丈夫です」

「そう言う奴に限って大体初日から来ないんだけどね」

バカにしてんのかコイツ。直美は胸中で毒づいた。

「二十一歳だっけ？ 大学三年？」

「はい」

「じゃあ俺と三っしか変わらないんだ？」

そう言われても、ああそうなんですか。としか言えない直美は敢えて曖昧に笑い、返事を濁した。しかし経営者は「さっき店にいた奴いたでしょ。あれが先月二十歳になった店長の舞川ね」と直美の返答など求めていないようだったが。

「薩摩っ子ラーメンで何してたの」

直美が履歴書に書いた、大学二年生までやっていたバイト先だ。急にそれを振ってきた経営者に直美は反応が鈍りながらも「レジと接客です。注文とったり、その注文の品を運んだり片付けたり、雑用してました」と歯切れよく答えた。

「あっそ」

反応はさつきと同じような相槌だった。

なんだか圧迫面接のような気がしてならない直美は、落ちた方が良くかもしれないと思いついた。こんないかにも高慢で高飛車な上司の下で仕事なんてストレスで胃に穴があくかもしれない。

こんなことなら時給千二百円＋交通費込みの甘い誘惑に負けるんじゃないかったと後悔し始めた頃、煙草の灰を灰皿に落としながら経営者が徐に、そのバイト先で友達出来ました？ と妙な質問を投げた。

直美の返事が、うえっ？ とバカっぽい返事になる。

「と……、友達ですか？ ええまあ、それなりに……」

「バイト帰りに晩御飯食べたし、休みがかぶると遊んだりしました？」

「しましたけど……」

何の質問なのかさっぱり分からないが、採用不採用に関係しない質問だということは分かる。いや、社交性があるかそうじゃないかを見極めているのだろうか。

経営者はため息と共に紫煙を吐いたあと、じゃあうちではそんなことしないで下さいね。と言い出した。直美の返事が、はい？ と疑問形になる。

「舞川が人付き合い下手だから従業員が次々と辞めて、今は俺と舞川二人で店をまわしてんの。うちは今すぐにも直美さん欲しいんだけど、もし二人が友達になって、店以外の場所で会うことになっ

たりして、それに関しては何に良いんだけど、もしそいいうとときに限って舞川が失態招いて直美さんがドン引きしてさ、「マジでお前死ねよ」とか言いながら舞川の口にトイレットペーパー詰めることになったら辞めるしかないじゃん？」

「あの……、あたし人嫌ってもそんな酷いことしなないです」

「そしたらまた俺等二人で店まわさなくちゃなんないから。あんまり前のバイト先みたいなの？ で関係築こうとしないだね」

そう言って経営者は短くなった煙草を灰皿でもみ消し、休む暇もなく二本目に火をつけた。直美はその一連の動作を見たあと「失態って、なんですか」とか細かい、低い声で尋ねる。

「錯乱するんですよ」

契約

経営者は平然とした態度で「錯乱するんですよ」と答える。

「暴れるってことですか？」

「もう間違いよ。鎮圧させるために殺しかけたことあるわ」

爆弾発言に片足突っ込んでるとしか思えないその思い出話にあまり触れないよう、直美は「舞川さんは普段どんな方なんですか？」と聞いた。ものの数秒であったが接客態度は紳士的で、外見からして既に「錯乱」が似合わない。

「見たままですよ。情緒不安定の頻尿です」

見た目でそんなこと分かるわけがない。

もう面接という域から逸脱しているとしか思えない会話に、直美が辟易してきた頃、経営者は組んでいた脚をほどき、相変わらず背もたれにはもたれていたが、頬杖をやめて直美と向き合って店のことを話し始めた。

「うちは遅刻とか無断欠勤を叱ることはないけど、その分、一分でも遅刻したら減給対象になります。あと、休みは基本的にそっち側の都合に合わせます」

そう言って経営者は、何か質問は？ と上目遣いで直美に聞いた。ただ、直美にはその経営者の声が届いているのにしばらく理解出来

ず、奇妙な間をあけてから、特にはないです。と抑揚のない声で答えた。

自分でも分からないが、大袈裟に心拍数が上昇する。

目が合った経営者のその目は、青灰色で酷く綺麗だったが、その分返って不気味で、一秒たりとも合わせる事が出来なかった。

直美がそんなことを思っているとも知らない経営者は、これには誰にでも言ってることですが、と話を始める。ハツとして直美は話を聞くスタンスに入った。

「突然来なくなることだけはやめて下さいね」

そういう当たり前のことを忠告しなきゃならないくらい、ここに来た人材は低レベルだったというのか。

そろそろ本格的にここはやめといた方が良くかもしれないと後悔し始めた直美は、どっから出しているのか識別不明の濁った声で返事する。

「仕事はそんなに大変じゃないと思うし、面倒くさいなあ、とか、行きたくないなあ、とか思ったら電話一本入れてくれたら良いから」

「そ、そんな緩くて良いんですか？」

「別に良いよ。まあ、その分お金は貰えないからね」

そう言って経営者は紫煙を吐きながら、それでも良いんなら好きに休めば？　なんて挑戦的な口吻で付け足す。さっきまでそんな話

し方していたか、急に人が変わったように真面目になったり、飄々としたり、偉そうだったり、どういう人間なのか全く見えてこない。

「一回でも電話入れなかつたら辞めたことになるんですか？」

直美がそう聞くと、経営者は少し天上を見上げ、何故か笑って「うん」と答えた。

「まあ、休むときは電話を入れる、ここでは友達を作らない。この二つさえ守って、後は舞川の指示通りに動いてれば給料は渡します」

なんて言いながら三本の指を上げているが、そんなケアレスミスを敢えて見逃した直美は、分かりました。と頭を下げた。

「じゃあ契約書に判押して」

支配人

「じゃあ契約書に判押して」

顔を上げた直美が、はっ？ と返事しているのも聞かず、経営者は半分も減っていない煙草を揉み消し、立ち上がって窓辺のデスクに移動した。引き出しからファイルとシャーペンを取り出してソファに戻る。

テーブルの上に広げたファイルに挟んでいる一枚の「契約書」を直美に差し出す。

「印鑑持って来てます？」と聞きながらシャーペンを契約書の横に置く経営者。

直美は脇においていた鞆を膝の上に乗せ、中をあさって印鑑の入ったケースを取り出した。しかし蓋を開けるとそこには肝心の印鑑が入っていないかった。

「すみません」

ちよつと待つて下さい。と経営者はまた席を立ち、また引き出しから何かを取り出し、それを席に戻つてから直美に差し出した。朱肉だ。爪印しろということか。

無事に契約書に名前と拇印を記した徳澤直美は、晴れてこのカフエ・ロマンスで働くこととなった。ここに来るまでは半年くらいまで続けようと思ったみたいだが、今ではもう三ヶ月経ったら辞めようという決意を固めていた。

「明日から来れそう?」

契約書を神経質なほどに三つ折にし、それをスーツの内ポケットになおした経営者がそう訊いた。直美は笑みを浮かべて「はい」と歯切れよく返事する。

「明日学校?」

「いえ、明日は授業入っていないので休みです」

「あそ。じゃあ十四時までに店に一度来て下さい。研修します」

「え、あの、十四時までって?」

「十四時までならいつ来ても構いません。でも、九時開店ですから八時に来ても誰もいませんよ」

「だったら時間帯指定しろよ。とも言えない直美は、もし十四時過ぎたら? と尋ねた。何故か経営者の口の端が上がる。

さつきと同じ感覚だ。真っ直ぐ直美を見る青灰色の目は何でも見透かされているようで気味が悪い。少し気だるそうな態度も、人を見下しているような話し方も、勘に障るというより恐怖を煽る。

「さあ? 謝れば良いんじゃない?」

なんとという初歩的な答えだろうか。直美は肩を落とし、まあそう

ですよね……。と変に力んでいた自分に気付いて、ドツと疲労感に襲われた。

こんなに疲れる面接は最初で最後だ。

「直美さんが一緒に仕事するのは僕じゃなくて舞川だから。舞川が暴れだすような原因さえ作らなきゃ平穩に過ごせますよ」

そう言つて経営者は立ち上がり、じゃあよろしく。と直美に手を差し伸べてきた。握手を求めているらしい。

反応が遅れた直美は慌ててその手を取り、立ち上がつて「よろしくお願いします」と頭を下げた。同じタイミングで手を離し、経営者が「駅まで送りますよ」とその場を離れる。また遅れを取つた直美は立ち上がり、後を次いだが奴さんが急にドアの前で立ち止まつたせいで彼の背中に顔面が衝突した。

「あれ、案外小さいんですね」

ぶつかったことなど意に介さず、振り返つた経営者は直美を見下す。経営者の顎下に直美の頭があるくらいだ。履いているサンダルのヒールを引くと本来は百五十センチ程度か。

「親もそんなに大きくないんで」と直美。

「まあ舞川がバカみたいにでかいんで、なんか新鮮ですけど」

「ああ、スタイルの良い人でしたよね」

経営者から舌打ちが出る。何も悪いことは言っていないはずだ。

「そつえば名刺未だ渡してませんでしたよね？」

何事もないように経営者は直美に体を向け、背広の内側に手を入れて銀色の薄っぺらなカードケースを取り出し、そこから一枚の名刺を手にして直美に差し出した。

「この経営者の安座間美咲と申します。分からないことがあっても決して僕や舞川に聞かずに自分で解決して下さい」

翌日、十四時までなら何時に来ても良いと言われた直美は、十時に店へと向かった。店の外観は、まるでアンデルセン童話のおとぎ話に出てくるようなクリーム色の外壁に、赤い入母屋屋根で、寂れた商店街の中では一際目立っていて見つけやすい。

昨日、ドアノブに掛かっていた「CLOSE」の札がないことを確認し、ドアを開ける。すると昨日も鳴った上に吊るされているベルが音をたてた。

それに反応したらしい、厨房に立つ店長の舞川まいかわ依来いくが店の出入りに視線を向けた。直美は頭を下げたが、特に何の反応もなく彼はただ手を動かしている。フロア側と対面しているバーカウンターで手元が隠れているため、何をしているのかは分らなかった。

「あの、今日は研修で来たんですけど」

厨房へ向かいながら直美がそう伝えると依来は「じゃあ着替えましょうか」と作業を止め、手を洗ってタオルで拭いた後、バーカウンター横のフロアと厨房を仕切る小さな扉を開け、直美を中へと入れた。

依来が直美を案内したのは更衣室だった。自分が使うロッカーの隣を直美に与え、既にそこに吊るされているエプロンを直美につけるように言った。予備としてもう一枚ある。

「何時間くらい入れますか」

直美が器用に後ろ手でエプロンの紐を結んでいると依來が訊いた。目線は直美にあっっていない。

「学校ある日は四、五時間程度で、休みの日は八時間入れますけど」

「じゃあ、……安座間さんにそう伝えておきます」

一瞬、奇妙な間があったのが気にかかったが、直美がエプロンを装着したのを一瞥した依來は、来て下さい。と義務的な態度で直美の先を歩いた。

次に来たのは厨房だった。白のタイルに赤を基調としたキッチン、フロアから見えることはないが細部まで洒落たデザインだった。バーカウンターの流し台にはさつき依來が皮むきをしていたのだろう、手長海老がボウルに水浸しにされて放置されていた。

「徳澤さんは厨房で仕事することはないんですけど、お客さんがデザートを頼まれた場合は作って頂きますので」

初めてみる手長海老に意識を取られていた直美はハツとし、相手に顔を向けた。

「あたしホールなんですか？」

前に働いていたバイトでもホールを任されていた為にそうなることも困ることはないのだが、デザートなど客に提供する商品を作ることは初めてだった。

「ええ。前まで安座間さんが接客してたんですけど、徳澤さんが来てくれたんで繁忙日以外は出ないみたいです」

あの人の接客……。色々と想像してみたがどうしても営業スマイルがモザイク掛かってしまう。

「徳澤さんは接客経験あるんですよね」

いつのまにか手長海老を洗いながら聞く依來に、直美は戸惑いながらも返事をする。

「前にいた蛸原さんと押切さんとは接客経験のない人だったから研修してたんですけど、安座間さんから話し聞いたら徳澤さん、前のバイト先で接客してたって聞いたので」

なんで研修しようと思ったんですかね。と独り言のように呟いていたが、直美の方が一番気になることだ。

勢いよく水が出る蛇口の栓を捻り、体を直美に向けて、とりあえず何か作ってみましようか。と依來が笑った。経営者と違って柔らかい微笑だ。ふいに直美からも笑顔がこぼれる。

二人は真ん中にある調理台に並んで立ち、依來はメニューの中から一番注文率が高い、いちごパフェの作り方を直美に教えた。といっても、用意されたシリアル、生クリーム、ソフトクリーム、いちごをバランスよく順番にパフェグラスに飾りつければ良いだけのことだ。見た目のセンスは直美に一任することだった。

「シヨコラと抹茶もあるんですけど、これも特にそれになったから

と言って特別何かをするということはないので。あ、でもアイスが溶けるのでなるべく早く作業して下さい」

そう言って依來は、じゃあ作ってみましょうか。とその場を離れ、壁際に置かれたステンレス製の大型業務用冷蔵庫から必要なものを取り出してきた。しかし直美としては客もないのに作っても大丈夫なのかという余計な懸念を抱く。

それを見透かしたのか、依來が準備に取り掛かりながら「出来たものは安座間さんに持っていきますので」と言った。昨日、直美の面接を行った事務所にいるという。

「安座間さんは普段なにされてるんですか？」と直美。

調理台の上にある収納棚に磁石で貼り付けているパフェのレシピを直美に渡した依來は「何してんでしょうねえ」と自身も分かっていないようだった。

逼塞

「あの人はいつも気が向いたら来るんですよ。つい最近までは人手が足りてたから滅多に来ませんでしたけど、人が入ったのにまた来てるって珍しいんですよね」

そう言い、じゃあちよつと任せます。と依來はその場を離れた。狼狽する直美は、もしお客さん来たらどうすれば？ と奴さんを目で追う。既に更衣室に続くドアを半開きになっている彼は平然とした態度で、接客して下さい。と返すが、ラーメン屋とカフェでは勝手が違うような気がして気持ちちは未経験同然。はあ……、と納得してみるものの、腑に落ちない。

「すぐ戻って来ますよ。お皿下げに行くだけなんで」

そう残して依來は更衣室の中に入った。

直美が使っているロッカーを開け、彼女が今日肩に掛けてきたキヤス・キッドソンのトートバックを手に取り、中から携帯、手帳だけを取り出して鞆を戻した。

その二つを持って向かったのは、安座間美咲あざま みさきのいる事務所だった。二度ノックをして向こうの「どうぞ」が聞こえてドアを開ける。そこには昨日は座っていなかった窓辺のデスクに脚を乗せ、スウィブルチェアにふんぞり返ってフォルトユナを吸う美咲の姿があった。昨日と違って長袖シャツにヴィンテージ加工された派手なジーンズの格好で、何故か足元が裸足である。

依來はデスクに直美の携帯と手帳を置いた。美咲は脚を引っ込め

それでもスウィブルチェアにあぐらをかいていたが 先に携帯を手を取った。

メモリ検索はグループに分けられていた。「身内」「友達」「大
学」「薩摩っ子」と分けられている。

美咲は物凄い速さでメモリを確認したあと、メールの受信ボックスを開いた。内容には興味ないのか、逐一誰かどんな内容を送ったのかまでは確認していない。

携帯を待ち受け画面に戻してデスクに置き、今度は手帳を開いた。そしてパラパラとめくったあと、直ぐに閉じ、携帯といっしょに依
來に渡した。

「他にご要望は」

「特にない」

相手にばれないように胸を撫で下ろした依來は、ふと息を吐いた。美咲は顔を俯かせ、目頭を親指の第一関節でぐりぐりと擦りながら
なんとなくリスっぽく見える、けど色々と忠告することはある。と言った。

顔を上げた美咲は、寝起きのような目つきに、鈍臭い口調で「あんまり話しかけるな、笑うな、ちょっと嫌な奴になれ」と奇妙な要望を言った。嫌な奴。依來の脳裏によぎったのはイライザだった。

「お前が考えてんのはちょっとちゃう」

何を考えてるのがバレたらしい。

一息にそうまくし立てた美咲は席をはずし、ラブシートにどっかりと座って依來に背を向けた。天井を見上げて紫煙を吐き、ガラス製の灰皿に煙草をもみ消す。

「知り合いにバイト先の話させないようにしろ。単調な仕事ばかりさせておけば他人に話そうとも思わない。食器洗いと注文取り、バスボーイの役割させ与えておけばいい」

そうなるとアイドルタイムのあいだ世間話などはするなということか。依來自身、あまり他人と喋りたいとも思わないが同じ空間にいながら全く喋らないというのは人並みに気まずさも感じる。

「手伝ってほしいときとかどうしたらいいですか」

途端、食器の割れる音が室内に響いた。美咲がコーヒーターブルを蹴倒し、置いていた食器とグラスが割れてしまったのだ。

美咲は依來に体を向け、ソファの上で膝立ちになって依來の胸倉に掴みかかった。バランスを崩した依來はラブシートに手をつき、至近距離で美咲の青灰色の目を見た。

綺麗過ぎて不気味と感ずるのは、初対面じゃない彼でも思えてしまつらしい。

「お前、何回言えば分かんだよ」

耳元で凄まれると全身が痺れて身動きが取れなくなる。

「誰がお前の仕事他人に手伝わして良いって言った？ なあ？」

固唾を飲み、謝罪する依來を見て美咲は相手突き飛ばした。

「俺の言う通りにしてれば良いんだよ。何回も同じこと聞くな。マジで殺すぞ」

「すみません……」

その謝罪に対して舌打ちを返す美咲は、ラブシートの脇から降り、またデスクに戻った。座るわけではなく脱いだサンダルを引っ掛けただけで、これから出掛けるみたいだった。

「俺が戻って来るまでに片付けといて」

それだけを言い残して美咲は事務所を出た。

新人研修

階段を上がっていると、上で直美がトレーに出来上がったパフエを載せて突っ立っていた。美咲を見て頭を下げている。そういえば朝食のあとにデザートが食べたいと依來に言ったような気がしないこともない美咲は、瞬間的に取り繕った笑みを浮かべ、来たんですね。と話しかけた。

「あの、これ。安座間さんに持つていくところなんですけど」

緊張しているのか、普段よりも声が小さくなっている直美だった。しかし美咲はそんな直美の頭を撫で、僕これから出掛けるんですよと返す。その仕草は直美を可愛がっているというより直美のサイズを気に入ったようである。

「え、じゃあ、これどうすれば？」

パツと手を離れた美咲は直美の横を通って「捨てちゃえば？」と言った。振り返って直美は、勿体ないですよ。と訴える。

「じゃあ食べちゃえばあ？」

振り返らずにそう言って美咲は更衣室の中へと入った。そこを通り、厨房に入ってその先にある勝手口のドアから店の外へと出るつもりらしい。スーツを着ていないときは店の正面玄関からは出たかないらしい。シャツにジーンズという簡易的な格好で不特定多数の人の前に出るのが嫌みたいが、店には客が来ていない状態である。

取り残された直美は、眉を下げ、唇を突き出してトレーに載せた

パフェをどうしようか考えていた。言われた通り食べるというのもアリなんだろうが、研修生という身で冗談ともとれる処理の仕方を選択したくはなかった。そうかといって廃棄するのも、的確な判断とはいえない気がする。

ため息をついた直美の背に、依來の呼ぶ声が聞こえた。振り向くと既に目の前に立っていた。おそろしく気配のない奴だ。生気薄いのか。

「どうかしました？」

「これ……、安座間さん出掛けちゃったからどうしようかと思って」

「ああ……、仕方ないですね。捨てましょうか」

まさかの産業廃棄物行きに声も出ない直美だった。た……、食べないんですか？ と自身も食べる気がないのにそう聞いてしまう始末だ。依來は気の抜けた顔をして、食べたいんですか？ と聞いているが。

「いえあのそういうわけじゃ……」

「おいてても仕方ないですからね。安座間さんはなんて言ったんですか？」

「捨てろって」

「じゃあ捨てて下さい。置いてたら逆に怒られちゃいますから」

そう言って依來は直美が持つトレイを手に取り、美咲が開けて閉

めなかつたドアが全開となつている更衣室に入った。

研修戻りましようか、と笑う依來を見て直美は、彼がどういう状況に陥り、どんな風に錯乱するのかと疑問に思った。もしかしたら美咲の嘘かもしれない。何故あの場に及んでホラを吹いたのかは疑問になるが、悪い冗談にしか思えない。

「舞川さんはここ長いんですか？」

厨房に戻り、十一時をまわつても未だに客が来ない上、研修を続けるといつても接客をするにあつての基礎知識が既に備わっている直美に、教えることはなく、雑談に入っている二人だった。依來はコンロの前に立つて赤ワインで煮込んでいる洋ナシを管理している。

「そうですね、もう二年くらいになります」

「二年で店長になつたんですか？」

火を弱め、別の作業に取り掛かつて「みんな辞めちゃうんですよ」と笑う忙しそうな依來を見かねて直美は、何か手伝いましょうかと聞いたが、大丈夫ですよ。と返された。なんとなくだが拒否に近い。

「辞めるって、やっぱり大変なんですか？」

話を戻した直美に、また依來が笑う。今度は申し訳なさそうというか、誤魔化すような曖昧な笑い方だ。

「まあ色々と事情があるんでしょうね。交通の便が悪いつていうの

が一番多かったですけど、みんな交通費もらっつといて自転車で来るんですよ。三十分、四十分掛けて。それで通うのがしんどいって言うから……、安座間さんが、じゃあ辞めて良いよって止めないんです。よっぽどその人に執着がないと去る者追わないんですよ」

確か美咲は、依來の人付き合いの下手さで従業員が辞めると言っていたような気もするが、価値観の違いなのか、それが現場をよく把握していない経営者の戯言だったのか、直美はただ笑って誤魔化すしかなかった。

「けど徳澤さんは多分とめられると思いますよ」

不完全燃焼

「けど徳澤さんはとめられると思いますよ」

喜ぶべきなのかも知れないが、あの経営者に限り。自分に何かしら執着しているのかと考えるに至ってしまう直美だった。どういふわけか恐怖さえ感じてしまう。

別に経営者が怖いわけじゃない。ただ、あの青灰色の目が怖かった。

「あの人、小さいもの好きなんですよ」

拍子抜けの理由だった。直美の眉間に皺が寄る。

「家でもハムスター飼ってるし、あとインテリアでシルバニアでしただけ？ あれの赤い屋根の大きなお家とか、森の学校とか、パン屋さんとかエントランスに飾ってますし」

小動物と同列というのは複雑な気分だった。

安直な理由に困惑を隠すことが出来ない直美は、張っていた肩の力を抜いた。あの青灰色の目で単に恐怖心が煽られているだけで、美咲個人はそんなに怖い人ではないのかもしれない。確かに、初対面の人間にいくら年下だからと高飛車な態度もどうかと思っただが、何かをされたわけでもない内から緊張を抱くのも変な話だ。

ため息を付いた直美は、「安座間さんってもつと怖い人かと思っただけ、別にそういうこともないんですね」と笑った。

「怖いですよ」

人の気持の入れ替えを無残にもぶった切る発言だった。

「酷く捻じ曲がった根性の持ち主で、今までに人の言うことを素直に聞いたことがない。ましてや、人に謝らせるのは得意でも人に頭を下げたことなんてないですし、それを否定しようものなら全力で自分を正当化させる、怖くないですか？」

完全に悪口じゃないか。

直美の言った「怖い」と店長の言う「怖い」の意味が違っていることは明白だが、その違いを指摘する気も起こらない直美は、また合わせたような相槌を打った。

しかし、お互い見事に相手を褒めることをしていない。お互いがお互いにとって「職場にいる仲の悪い人間」なのかもしれないが、依来が二年もここで働いていることを考えれば、お互いが嫌っているようには受け取れない。

「けど、二人ともお互いのことよく知ってますね」

「一緒に住んでると分かってきちやうんですよね」

血液型を答えられたような軽い口吻だった。笑みを浮かべたままの直美の表情が固まる。依来は眉を挙げ、不思議そうに、そんなに珍しいですか？ と訊く。珍しくはないが驚いたのは隠せない直美だった。

直美が何かを言おうとしたその矢先、背中にベルの鳴る音が響いた。客が来たらしい。直美が咄嗟に、いらっしやいませ。と声を張る。

「あ、席どうすれば？」振り返った直美が訊く。

「窓際の席に案内して下さい。そのあとその浄水器」依來の長い指先が先ほど立っていた調理台の横に置いてある浄水器を指差す。「あれを使って人数分のお冷汲んでメニューと一緒にお客さんに渡して下さい」

そう言われて伝票とメニューを受け取った直美はフロアに出て、ラーメン屋で培った板についた笑みを浮かべ、客を窓際の席に案内した。

依來は直美が初仕事をしているあいだ、一旦厨房を出た。更衣室を通り、地下に続く階段へのドアを開ける。足早にそこを降りて事務室に入り、直美の携帯と手帳を手にとった。

更衣室に戻って手際よく直美の私物を彼女のかばんの中にしまい、ロッカーのドアを閉めた。

厨房に戻った依來が見たのは、客に注文をとっている直美の姿だった。さすがに良心が痛んだ。

「オニオングラタンスープ、子羊の背肉ロティ、トマトのファルス。注文入りました」

伝票とメニュー片手に直美が戻ってきた。伝票を受け取った依來は早速調理に入るわけだが、そのあいだ直美は暇だった。「あたし

何をすれば……」と半ばうつろたえている。

「休んでて良いですよ」

まさかの休憩を与えられた。更衣室に続くドア付近に二人席ぐらいの小さなテーブルと二つ椅子がある。そのテーブルの上に何冊か雑誌が備えられていた。最新号のan・an、ロッキング・オン、バックステージ・パス、マキア。

だがそこで単純に引き下がるほど若くなかった。いやでも……。と、一応お金をもらう身だ。前で忙しそうに調理をしている人を前にして休むのも気が引ける。

「本当に休んでて良いんですよ。安座間さんには徳澤さんに必要以上のことはさせるなって指示もらってるんで。料理出来たら運んで下さい」

そう言っただけは大型冷蔵庫から使用する食材を取っていた。

敢えて指示をするなら休んでいるということか。直美はか細く返事し、とすん、とおとなしくその厨房隅に寄せられている二人席のパイプ椅子に腰を掛けた。ただたどしい動きでマキアを手取る。だが内容は頭に入ってこなかった。

ガラスの破片の軋む音が響き、長い指の先がそのガラスで切れた。依來は咄嗟にガラスを手放し、切れたところ舐めた。幸い、切り傷が浅かったために血が溢れ出てくることはなかったが、じんわりと血が滲み出てくる。

痛覚が麻痺して痛みを感じなかった。慣れた手つきで事務所の散らかった割れた食器とグラスを片付け、ゴミとホウキ、ちりとりを片手に部屋を出た。

「依來」

利き手でドアノブを持ち、手前に引いてドアを閉めていると、階段上部から美咲の声が聞こえた。振り向き、見上げると、ジーンズとシャツの格好に豹柄のパーカーを羽織っていた。私服は私服だが、午前中に着ていたものと違っていた。

階段を上がりながら依來は「服、変わってますけど」と聞いた。美咲はジーンズの尻ポケットから取り出した煙草を一本くわえ、ライターで火をつけたあと「藤井さんの家に行ったら香水の匂いがうつって気色悪いから着替えた」と返す。

「あの人のデイオール狂具合も甚だしいよな。コルセットが見苦しいんだよ」

階段を上りきった依來は美咲の横で更衣室へと続くドアを開け、

何か言っていましたか。と聞いた。美咲を先に中へと通す。

「別に、何も。まあ、お前とセックスしたかどうか一分に一回は聞かれたけど」

「なんでそんなこと聞くんですか」

「自分がおばさんだから他人のそういう話聞くしか楽しみないんだってよ。旦那とも死に別れた学のない女って言うこと訊くこと全て下衆いってどうか、特にあのおばさんは元々、男にしか興味ない人だし。キシヨいんだよね。一々」

そう言って美咲は紫煙を吐き、更衣室のど真ん中に置かれたソファにどっかりと腰を掛けた。その後ろで依來がロッカーから取り出した私服に着替えている。

「そういえば、徳澤さん。今日来てたけど、どうなんだ」

「ああ、前に接客というか、飲食店で働いていただけあって飲み込みは早いですし、特に教えることもなかったです」

「お前、明日、ノンノとモア買って来い」

突如と片仮名を言われて脳が一時停止を食らった。のんの？と何のことを言っているのか分かっていない。

「雑誌だ、雑誌。女性ファッション雑誌。このあいだ押切と蛸原がいたときはキャンキャンとエッグ買ってただる。その並びにあるから明日買って来い」

そう言つて美咲はルイヴィトンのヴェルニラインの長財布から一枚、千円札を取り出し、それを着替え終わった依來に差し出した。それを受け取つた依來がぼんやりとした口調で、何買うんでしたっけ。と聞く。

「ノンノとモアな」

「はあ……」

直美が退屈しないよう、或いは依來への注意をそらすための小道具として雑誌を買い揃えるつもりらしいが、今日という日に限つて直美の研修を行った十五時までのランチタイムは暇だったのに十九時から二十四時までの、先ほどのディナータイムは忙しく、依來一人で店を持っていて慌しかった。正直言つて今度から出来るだけ直美にディナータイムに入ってもらい、手伝つてほしい気持ちがあった。

それでも依來にそのような訴えが出来る発言権、どこにもなかったが。

裏口から店を出た二人は家へと向かった。駅方面とは逆方向へと歩き、商店街を出ると、地味ではあるが住宅街に風景は変わる。ロマンズから徒歩五分圏内にある、新築の十五階建てのマンション「オリアクス」の最上階、角部屋一五〇が、二人が住む家だ。

玄関扉を依來が開け、先に美咲が中に入った。子供みたいに雑な脱ぎ方でサンダルを脱ぎ、深夜だというのに足音を立てて廊下突き当たりの十二帖ほどあるリビング・ダイニングへと向かう。早速テレビをつけ、掃き出し窓のカーテンを閉めた。

未だ玄関先で鍵を掛け、美咲の脱ぎ散らかしたサンダルを揃えている依來に、「このあいだ買ったコンドームはー？」とまるでお菓子の行方を聞いているように依來が言った。「それなら寝室においてますけど」とリビングに向かいながら答える。

「ふーん」聞いておきながら興味なさそうだった。

「な、なんですか？」依來の顔が引きつる。

「別に」

子供みたいにそっぽを向き、美咲は、風呂はいろー。と一人、リビングを出た。

L? v r e s (前書き)

性描写(同性同士)を含みます。それ目的ではありませんが御了承ください。

リビングを出た美咲が二十分で風呂から上がると、ダイニングのテーブルには普段から自分が座っている席にカフェでしか食べられないような全長三十センチのチョコレートパフェが置かれてあった。未だ台所で何か作っている依來が作ったものだ。

美咲は濡れた髪をタオルドライしながら席に着き、柄の長い用意されたスプーンを使って何も言わずにパフェを食べだした。午前一時をまわっているこの時間帯に甘いものを食べるというのは、いくら暴飲暴食を繰り返しても太れない体質が故のことか。

「依來」

台所でパスタを盛り付けていたところ、美咲の声に依來が顔を上げた。布巾とって。と言う美咲の口元、指先にはチョコレートがついている。

出来上がったパスタ片手に依來は布巾を持ってダイニングに出た。手に持ったそれを美咲を差し出し、向かい側の席に座って晩御飯にありつく。

「藤井さんが今度、お前が来いだって」

そう言いながら美咲は依來が準備したトールグラスを手にし、それを依來に向けた。条件反射のように依來は一旦フォークを置いてウィルキンソンのジンジャエールをそのグラスに注いだ。「僕が行くんですか？」と聞き、注ぎ口をナプキンで押さえて瓶を上げる。

「単にお前に会いたいただけだと思うけど。あの人、変態だから」

「ああ……」

なんとなく否定は出来なかった。

「明日も徳澤さん来るんだっけ」

「ええ。明日は学校あるから終り次第来てくれるそうです。学校ある日は四、五時間程度で、休みの日は八時間入るって本人が」

「暇なのか」

返す言葉が他人事ながらになかった。

「あ、そういうえ週に何回入れるか未だ聞いてませんでした」

「週二、三日でええんちゃうの」

明日シフト作っておくから。と続けた美咲はパフェを食べ続けていた。指先についた生クリーム、チョコレートを舐め、スプーンですくったバニラアイスをテーブルに落としたり、落ち着きのない食べ方だった。汚いというよりは手つきがたどたどしく、二、三歳の子供が食べているようだ。

「あ、そうだ。俺、本棚欲しいんだけど」

「本棚？」

「このあいだアマゾンで漫画大量買いしちゃって、足りなくなった」

「ああ、じゃあ来週買いにいきましょうか」

「明日がいい」

無然とした態度で「明日」の強調に一瞬遅れをとった依來は、お店はどうすれば。と聞いた。女子高生みたいな口吻で、午後から行けば良いじゃん。と返されるが、ランチタイム終了の十五時からデイナータイム準備に入る十八時のあいだ、目的地と家の往復をするのは不可能だった。

「時間的に厳しくて」

「てか休めばいいじゃん」

なんて簡単に言うんだろうか。美咲は「適当に理由つけたらどうとでもなるじゃん。それにドンキとか、梅田にも行きたいし」と続ける。だらしのない食べ方をした残骸のパフェグラスが、やけに汚れているように見えてしまう。

席を立った美咲は、じゃあ明日ね。と一方的に約束をこぎつけ、寝よ。と言ってダイニングを出て行った。ドアを閉めた音がしたあと、洗面所のドアが開閉する音が響く。なんだまた風呂入るのかと思ったら蛇口の栓をひねる音が聞こえた。歯を磨くらしい。なんだか脱力した瞬間だった。

どうでもいいことを考えながら、依來は食事を済ませたあと、一人、浴室でシャワーを浴びた。

二十分後、洗面所の向かい側にある寝室に入ると、腰窓に近い位

置に置かれた壁際のベッドで美咲が仰向けに寝転がって漫画を読んでいた。依來が入って来ても全く気にしていない。

ベッドに腰を掛け、枕元の脇にあるナイトテーブルに置かれた時計を確認した。一時二十一分。時計を手にし、「何時にイケア行くんですか？」と振り返った。美咲は振り返るが「イケア？」と聞き返してきた。

「イケア行くんですよね？」

「どっ？」

「このベッド買ったところですよ」

「アイキアで買ったんだけど」

英語かドイツ語かの発音問題だった。

納得した依來は呼び名をアイキアに統一し、何時に行くんですかと改めて聞いた。しかし美咲は漫画に戻って、別に何時でも。と丸投げもいいところだった。

「じゃあ、起きたら起こして下さい」

目覚ましのセットをせずに時計をテーブルに置き、布団をかぶって横になろうとしたところ、漫画を読んでいる美咲を見て「場所変わります？」と声を掛けながら振り返った。自分の方が明かりに近いからだ。

「んー。もう寝るからいい」

そう言つて美咲は寝返りを打ち、腹這いになつてヘッドボードに手を伸ばして漫画を起いた。そんな面白くなかつた。と小言を連ねながら手を引いて寝る体勢に入る。そこに依來が「布団かぶらな」と風邪引きますよ」と彼に布団をかぶせようとするが、その手を美咲が掴み、目が合った。

美咲の手が掴んだ依來の手を離すと、依來の手が美咲を寝かしなから腰に回り、もう一方の手が頬に触れた。

だらしなくなつた唇が引き寄せあい、重なり合つた。

唾液の混じる音と舌の絡む音が響いて、不本意に声が漏れる。その中、依來の細長い手がナイトテーブルで煌々と明かりを灯している電気スタンドのスイッチをオフにし、途端、部屋は暗闇となつた。目が慣れるまで手探りで相手を捜し合う。

きつかけは単に酒に酔つた勢いで、それを一度きりの過ちとはしなかつたことが、今に繋がつた。

首筋に噛み付き、愛咬を繰り返される度に美咲は弱々しい嬌声に似た声を上げ、強くシーツを握り締め、身悶えた。息が切れて体の熱が上昇する。

声を押し殺すことも出来ず、部屋中には荒い息が響いていた。

IN THE DARK

朝霧が視界を狭める。気温も低い午前五時。閉められていた鍵の掛かっている門扉を開けると静まっている住宅地に金属的な音が少し響いた。石畳の敷かれた短いアプローチを歩いてアルコールに立ち、ジーンズの後ろのポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込んで回したが、感触がなかった。元々開いていたらしい。無用心な……。胸中で呟き、差し込んだ鍵をポケットにしまってドアを引いた。家で寝ている住人に配慮のない物音を出す。

玄関先から真っ直ぐ続く廊下の最中、左手の壁にリビングに続くドアがある。半開きになって明かりが漏れていた。母親が起きているらしい。無視しても良かったが母親に用があったので靴を脱いだその脚でリビングに向かった。

十二帖のリビングダイニングのダイニングの方で、四人テーブルの椅子に腰を掛けている母親の姿があった。栗色の胸下まである髪は巻き髪のようにだったがクセ毛による天然もので、少し垂れ目のバタ臭い顔立ちは息子によく似ていた。

「何やってんの」

ドアを開け、中に入って声を掛けた。母は息子の久しぶりの帰宅に目を大きくする。

「ねえ、今までどこにいたの？ 心配したのよ」

席を立って母は焦ったように聞いた。一週間連絡なしで外泊していた息子を叱るところか顔色を伺うようだった。

息子は、そんな母親を無視してキッチンに入り冷蔵庫を開けて開けっ放しのまま中に入ったコーラをコップに注がず、そのままペットボトルに口をつけて飲み始めた。

乱暴な仕事でコーラを冷蔵庫に戻した息子は壊れそうなくらいの力で冷蔵庫の戸を閉め、キッチンから出ては母親に「お金、取りに来ただけど」と抑揚のない声で話した。

「おかね？ ああ、お金ね。いくら？」

そう言っただけで母親は踵を返し、リビングのソファに横たわっている鞆から財布を取り出した。手に持った財布を、息子は傍まで来て奪った。中に入っている万札十枚全て、まるでただの紙切れのように抜き取った。小銭しか入っていない財布を母親に投げつけた。

「ねえ、お金ならあげるからお母さんの傍から離れないで」

縋るように息子の腕を持った母はわがママを言う子供みたいに主張したが、当の息子は思いつき腕を振り払った。その衝撃で母親は床に倒れこむ。

「なんでお前といなきやなんねえんだよ」

倒れこんだ母親の腹を蹴り、唾を吐いた。

「ねえ、お願い。私あなたしかいないの。あなただけが生き甲斐なのよ」

それでも尚、母は息子の脚に縋り、離すまいと手に力を込めた。息子の口元から舌打ちが漏れる。うぜえんだよ、と心ない言葉で罵

倒しては母親の髪を鷲掴みにして傍にあったガラス製のコーヒート
ーブルの表面に何度も母の顔面を打ちつけた。次第に母親の手が離
れて抵抗も出来ず、息子に馬乗りにされて殴られ続けた。

「なんで俺がお前のためにお前の傍にいなきゃなんねえんだよ」

美人だった母親の顔が真っ赤に充血し、膨れ上がった。鼻血が出
て前歯が折れ、まぶたが腫れて目が開かない。それでもか細い貧弱
な声を上げた。

「せつかく生んだのに……」

それが酷く、感に障った。

立ち上がった息子は最後に母親の顔を踏み潰した。般若のように
歪んだ表情を浮かべて、うるせえんだよ、と喉がはち切れんばかり
に怒鳴った。

「お前が勝手に俺を生んだんだろ。誰も生んでくれなんて頼んでね
えんだよっ、自分が一人で生きていきなからって俺を巻き込むな」

何度も母親を蹴りつけていた。八つ当たりには似ていたかもしれな
い。呪文のように、お前のせいだ、お前のせいだ、と何度も怒鳴っ
て、母の息の根が止まっても尚、暴力を振り続けた。

最期の母親の笑った表情が、目に焼きついた。

ハツとして目を覚ますと、ベッドの上にいた。辺りを見回すと未
だ夜中なのか、部屋は暗くて超音波の甲高い音が耳についた。右肩

に人気を感じる。

手を伸ばして手探りでベッドの横脇にあるナイトテーブルの電気スタンドのスイッチを探した。感触があつてスイッチを入れると部屋に明かりが差し込んだ。横で寝ていた依來がこつちに振り返った。「どうしたんですか？」と声からして起きていたみたいだ。

「美咲さん、すごい汗ですけど……」

「ええ……？」

言われて自身の体を見れば着ているシャツが水でも浴びたかのように濡れていた。顔を触るとじつとりと汗に濡れている。

「早く着替えないと風邪ひきますよ」

依來が気を利かせてそう言う。美咲は鈍臭い仕草で体を起こしてから、風呂入ってくる。と言ってベッドから降り、寢室を出た。

フックに掛かったシャワーから勢いよく噴射する四十度のお湯を頭から掛かった。ドアの外から依來の声が聞こえる。返事をする洗濯機の上に着替えを置いていくという内容だった。わざわざ着替えを持ってくるなんて、自分が出来ない火事全般をさせるために家に置いていたのだが、ここまでくると板についていた。

五分程度で風呂から上がり、着替えを済ませてドライヤーで髪を乾かしてから寢室に戻った。

寢室には依來がベッドのシーツを変え終わったところだった。美咲を見て、何か言いたそうだったが口にしたのは「さっぱりしてま

すね」「とよく分からない一言だった。

「何言ってるの」「美咲から冷めた言葉を返される。

美咲が壁際に寝て、依來が電気スタンド側で横になった。布団をかぶって電気消そうとしたとき、美咲が口を開いた。「お前の母親ってどんなの」と、ここで聞くべきか分からない妙な質問で、依來の手が止まった。

「別に。普通だと思う」

「母親に似てる？」

「ああ、顔は。体のサイズなんかは父親に似てるんですけど」

「俺は全部、母親に似てるんだってさ」

「周りにそう言われたんですか？」

「母親本人に言われた」

仰向けに寝ていた美咲は体を依來の方に向けた。熱いお湯を浴びて頭も目も冴えたのか、今から眠りそうな気配はなかった。

「お母さん美人なんですね」

「さあ。俺が見たのはブツサイクな顔だったけど。鼻血出て前歯折れて最悪」

「それ怪我してるじゃないですか」

「俺が殴った」

美咲の口の端が上がった。嬉しそうに笑って、恍惚とした表情だった。

「殺したんだ、十八のときに」

嘘を言っているにしても笑いながら言うのはどういう意味があるのか。親を殺したなんて嘘を言う意味はあるのか。

本当だったら、それこそ美咲の人格を疑う。だから依來は息を飲み、どうして？ と話を続けた。

美咲の顔から笑みが消える。

「俺を生んだから」

平穩な住宅地の中、デザイナーズマンションくらいに凝った外觀の一軒家の門柱には、藤井と彫られた表札が飾ってあった。依來はその表札の下にあるインターホンを鳴らし、「開いてる」と酒焼けした声を聞いて中に入り、アルコールに立った。玄関ノブに手を伸ばし、持って引くとここも開いていた。

広いエントランスは靴を脱ぐ場所と廊下の境目はバリアフリーを意識しているのか、上がり框がなく、廊下は御影石で出来ていた。照らす明かりも天井ではなく床の端沿いに設置されていた。自分の家よりもインテリアに拘っている。

「いらっしやい」

廊下の先を右に曲がるとリビングだった。そこには家の主である藤井リオナが部屋中央のワインレッドのソファに深く腰を掛けて待っていた。彼女の手前にあるテーブルには鍍金のバケツいっぱい氷を入れて冷やされたシャンパン、小皿に盛られたメロン、いちご、オレンジ。明かりも殆ど入っていない暗がり、どっかのラウンジのようだった。

「何やってんですか」依來の顔が引きつる。

「雰囲気出してんのよ。まあ座れば、ワイン飲む？」

「日本酒ないんですか」

そう言いながら依來は藤井の向かい側にあるラブシートに浅く腰を掛けた。薄っすらと赤味入ったほのかな証明がさつきからちらついていた。天井を見上げるとどういうことか、小さいミラーボールが吊るされ、回っていた。「アレわざわざつけたんですか」。

「雰囲気出してんのよ」

ショットグラスに日本酒を注ぎながら藤井が言った。雰囲気とか形から入る主義なのか知らんが何を目指したいのかよく分からない。

日本酒を依來の手前に差し出した藤井は「王子様は？」と聞いた。一瞬何のことか分からなかったが一口酒を飲んでから依來は「家です」と返した。美咲のことだ。

「そう、元気にしてる？」

「この前会ったんでしょ」

「何が起こるか分かんないじゃない」

何を懸念しているのか、益々依來の表情に引けが出てくる。この雰囲気といい、咬みあわない話といい、終戦直後生まれだということに素肌に真っ赤なレースのベビードールを着てグラビアアイドルさながらの体勢でソファに身を沈めているのが輪に掛けて腹立たしい。顔のシミも皺も美容整形だかエステで除去し、腕や脚、胸などにもヒアルロン酸を注入して若さを保っているようだが、それを努力と看做すべきか年増の若作りと看做すべきか、奇妙な苛立ちに駆られた。

「それで……、僕を呼び出したのは？」

「あなたの母親が見つかったのよ」

驚くと声も出ないのだと今になって分かった。依來は動揺を誤魔化すようにか細い声で、そうですか、と低い声を落としたが、藤井はうつろな目を浮かべて口の端を上げ「美咲の母親と随分、違うのねえ」と高飛車な態度で言った。ワインを一口飲み「部屋も汚くて、台所も何日も前のご飯の食べ残しや食器で溢れてたわ。その割りにウォークインクローゼットなんかはブランドの服と鞆ばっかつ」と手振り加えて話しを続けた。

「あたしが言うのもなんだけど、子供持つ資格なんかないわね、あなたの母親」

「藤井さんって結婚なさってましたよね」

「二十年も前の話よ。やっぱり女って旦那死んだら長生きするのね。あたし後十年は生きられるわよ」

そう言っつて馬鹿笑いする藤井に依來は、そうなんですか、とお座なりな返事を連ねて顔を俯かせる。

「元気でした？ 母親は」

自分の親のことなのに他人の様子を伺うような聞き方だった。愛嬌笑いまで浮かべている自分がいる。

「死んだわよ、あなたの母親」

「死んだ？」

顔を上げると、今度は自然に笑いが込み上げてきた、嘘ですよ？ と変に笑いだけが込み上げてくる。面白いことでもないのに、頬が緩んで上手く取り繕えない。

「なんであたしがそんな嘘言わなきゃなんないのよ、警察はおそらく貴方がいなくなった悲しみを苦に自殺と看做すわ。そうなるように死んでたから」

何も言えない依來は、また顔を俯かせて、そう……。と返事するしかなかった。母親の死を実感しても悲しみも悔しさもなんの感情も沸かないというのは、肉親に少しの愛を持たなかった母親に似てしまったのだろうか。

「あなたの母親って凄く綺麗な人ね」

「そうですかね」

「まあ、あなたの顔に比べたらどうってこともないだろうけど。嫌味な顔よね。男のくせにそんな顔立ちしてるなんて」

不気味な笑い声が聞こえる。依來は、そうですか。と他人事のように答えるしかなかった。

「ねえ」

湯が沸騰したような音が聴こえた。藤井がグラスにシャンパンを注いでいた音だ。炭酸が弾ける音に変わる。

「はい」

「あんた美咲とセックスしてるんでしょ」

「してないですよ」

「じゃあ美咲の首筋にあった充血した痕って何？　いくつもあったけど」

「あんたどこ見てんだよ」

「別に良いじゃない。美咲って可愛い顔してるし。性対象前にした若い男が大人しくしてるなんて思わないもの。あなた未だ二十歳でしょ？　エテ公に理性なんてないわ。やってんでしょ？」

何かにつけて下世話な話ふってくるなど依來の顔が引きつった。半ば自棄になって肉体関係を肯定すると藤井は「ちゃんと避妊してんの？」と、かなり間違ったことを聞いてくる。認めるんじゃないかと後悔した。依來の眉間に皺が寄る。

「それ知ってどうするんですか？」

「コレあげるわ」

藤井が腰あたりのクッションの後ろに手を入れ、手に取った何かを依來に向かって投げ渡した。受け取るとそれは中身が想定出来ないよう、女性でも買える可愛いパッケージのコンドームだった。旦那と死に別れ、既に性欲というものに無縁であるはずの藤井が何故こんなものを持っているのか、不信感が顔に出る。

「こんなもの貰っても……」

「あら、もしかして生でやってるとか？」

ド突いたるかこのオバはん。初めて依來に雑な感情が芽生えた。

「入れる側が身嗜みとして持つておくのが常識よ。っていうかー、あんたが上よね？ 年下だけど身体はあんたの方がでかいし」

「改めて聞くのやめてもらえませんか、なんかムカつくんで」声に棘があつた。

藤井は苦笑いを浮かべて「だってあの子が年下に犯されてるなんて想像出来なくて」と酷い表現を用いて素直に思っていることを述べた。「あの、同意のもとなんで……」と依來は訂正するが藤井は「あの子ちゃんとイってる？ 感じてる？」とだいぶり組んだことを一人勝手に心配していた。

「あんたもうAV観てるよっ」依來から怒鳴り声上がる。

「美咲の性格分かってるでしょ？ 大人しく受身になるタイプじゃないじゃない。かといってタチだとも思えないし」

不服そうに言う藤井だったが依來としてはもう話すのも嫌になつていた。

しかし、今住んでいるマンションは藤井名義のものだ。機嫌を本格的に損ねて解約されてしまう可能性もある。なるべく藤井には自分にストレスが掛からない程度に媚びるとも美咲に言われていた。しかし美咲自身がそれをしているのかは不明だが。

「騎乗位ですよ」吐き捨てるように嘘を言った。

「あんたに跨って腰振ってんのも想像つかないけど、まあ大人しく受身になってるよりはそれらしいか、っていうかやっぱやってんじやん。あんた等デキてんの？」

藤井は疑いもせず、何故か満足気だったが。

「美咲さんが好きなのは美咲さんですよ。僕じゃないです」

「あんたは？」

人を試すような、好奇心に満ちた目だった。心底腹が立ち、口の端が引きつる。珍しく自分以外の人間に嘲笑紛いの溜め息をついた。

「あなたには言いませんから」

それだけを残して依來は立ち上がり、それじゃ。と席を外した。

「母親は殺されたのよ」

背中に藤井の声が届き、それが依來の足を止めた。振り返るとしたり顔で笑っている。掛けていた眼鏡を外し、テンプルのモダンを唇に沿わせた。

「美咲にね」

午前一時の危険地帯

空の色が薄暗くなってきた十九時。いつもより三十分遅れて店を開店させた依來は、料理の下準備をしたあと、店の出入り口にイーゼルを置いて、その上に黒板を掛け、チヨークでディナーメニューをしゃがんで書き込んでいた。

「おはようございます」

背中に届いた声に振り返ると直美が立っていた。依來が藤井の家に行く前、直美に電話でランチの時間は休むからディナーの時間に来てくれと連絡を入れていたので指定した時間通りに来たようだった。

「今日遅くないですか？ 開店時間」

「ちょっと僕が用事で出たので。けど大体開店時間から十九時までであんまりお客さん来ないから丁度良いといえば良いんですけどね。ここらへんも閑散してますし。ここから五つ目の駅界隈に大型ショッピングモール出来てみんなそっちに行くんですよ」

そう言っただけで依來は立ち上がり、直美に振り返って「何か食べてきました？」と徐に尋ねる。直美は返事が鈍り、いえ何も……。と本当のことを話した。依來は左腕に装着した時計を確認しながら「未だお客さんが来る時間帯でもないですし、何か作りましょうかと柔らかい笑みを向けた。

「あら、良いんですか？」

「ええ。というか、僕がお腹空いてるだけなんですけど。僕だけ食べるのも気が引けますし、一緒に食べましょう」

どうぞ、と戸を開けた依來は先に直美を中に通した。ああすみません、と低姿勢になってしまいが、ふとした瞬間に『そっいえばこの子年下なんだよなあ……』と気付かされる。自分が二十歳の頃にこんな気遣いが出来ていたか疑問が生じる。

パガニーニのバイオリン協奏曲第二番第三楽章『ラ・カンパネラ』が流れている店内のカウンター席のバースツールに直美は腰を掛け、依來は厨房に入って「パスタで良いですか？」と聞いた。直美は頷き、それには依來までもが吊られて笑った。

数分して直美の前にモツアレラとトマトのクリームパスタが差し出された。目の前に出された食事に「こんなの食べて良いんですかっ？」と訊いてしまう。同じ品を手を持って厨房から出て来た依來は、どうぞ。とまた笑みを浮かべた。直美の横のバースツールに腰を掛け、早く食べた方が良いですね。お客さん来ちゃいますから。と言って直美にフォークとスプーンを差し出した。

器用にフォークにパスタを巻きつける依來がそれを口に運ぶ様子を見ていた直美に気付いた。「なんですか……？」と、ぎこちなく聞くと直美は真剣な顔で「舞川さんつてももの食べるんですね」と言う。

「ええ。生きてますから」依來も真剣に返した。

「なんか生活感ない人だなと思ってたので……。もしテレビとかに舞川さん映ったらこの人CGなんじゃないかって思ってたところですよから」

「僕なんなんですか……」

苦笑いを浮かべる依來は腰を浮かしてパスタと一緒に持ってきた冷えたフイジーウォーターを直美のグラスに注いだ。そのあと自分のグラスに注いでいると直美が「美人って言われませんか？」と聞いた。

「ないですねー。というか僕、友達いないんですよ」

「確かにある種のとっつき難さはあると思いますね」

「自分じゃ解りませんが、どういったところか？」

「綺麗過ぎて声掛けるのも躊躇ってしまうんですよ」

「でも直美さんは僕と普通に話してるようですけど」

「でも顔見てないですよ。直視出来ない顔ですよね」

「僕、嫌われてんのかなって傷つくんですけど……」

「それはないですよ……。得すること多いでしょ？」

「それこそないですよ。普通なんじゃないですかね」

「そうですねえ……。外見じゃ損得もないのかな」

「あ、でも安座間さんは得なこと多いと思いますよ」

水を飲むときに直美の喉が鳴った。ここで経営者の名前が出て来たからだ。確かに経営者は一般人には見張る顔立ちをしていると言って良い。しかし、性格があれだ。もし出会う場所が職場でなければ絶対関わらないように勤めているところだ。あんなあからさまに人を見下した態度を取る人間が得をするとは思えない。下手に反論すると何言われるか解らないからみんな、下手に出てしまうのだろうか。

そんな胸中を正直に話せるわけでもないので直美は「そうなんですか？」とシラを切った。依来は頼杖をしてフォークをくるくる回してパスタを巻きつける。食べる為ではなく、手癖のようになっていた。

「ああいう性格ですから、いくら自分が悪くても絶対、悪いって思わない性格って結構、得だと思っんですよね。人の為に悩まないところとか、機嫌が悪いと八つ当たりとか平気でするし、自分が欲しいものは人の金使うことも厭わないし、それを責められたら嘘並べて自分を正当化するんですよ。得じゃないですか？」

直美が言う「得」の話とは随分方向性が違っていたが、存外、安座間美咲という経営者は人格破綻者のようである。思っていた以上に根性が捻じ曲がっている。

「それは……」フォローの言葉すら思いつかない。

フォークを音立てて置いた依来は、溜め息をついた。

「けどまあ、安座間さんが全部悪いわけじゃないから、何とも言えないんですけど」

そう言っただけで席を立った。依來は空いた食器を手に持ち、厨房に入った。またカウンター越しに立って洗いを始める。数分してから直美は手元の食器を下げ、客が入ってきた。

「今のどういう意味ですか？」

客から取った注文を依來に渡したところ、直美が言った。依來は少し考えてから「そのままの意味ですけど」と気の抜けた表情を浮かべる。直美にしてみれば『そのままの意味』がよく解らない。

それでも懸命に納得しようとするフリをする直美を見て、依來は噛み砕いて答えた。

「身勝手にヒステリックで嘘ばかり言う性格になったのって、あの人だけのせいじゃないって僕は思うんですよ」

受け取った伝票に目を通し、鴨フィレ肉のカシスソースと若鶏のソテーか、と確認し、調理に取り掛かっていた。直美が「手伝いましょうか？」前と同じように聞いても「良いですよ。そこで座って下さい」と明るい口調で返していた。邪魔だからどいてろ、と皮肉を言われた気はしないが、こども雑用ばかりしかやらせてもらえないと時間が経つのが遅く感じる。

仕方なく厨房の隅の、更衣室に続くドア付近にある椅子に座っていた。雑誌が最新号になっている。眺めているとすかさず依來が「読んで良いですよ」と声を掛けてきた。目が合うと穏やかに笑っているが、腹の中で何考えてんのか解らなくなった。

直美がロッキング・オンを手にしたとき、フロアからグラスの割れる音が響いた。客の小さい子供が誤ってグラスを床に落としてし

まったようだ。直美が行こうとしたが、依來が止めた。

「僕行きますよ」

そう言っただけで依來は直美の返事を待たずに厨房の壁の片隅に立て掛けたホウキとチリトリを手に取り、フロアに出て変わらず穏やかな態度で「大丈夫ですか？ 僕やりますから結構ですよ」と片付けに取り掛かっていた。客は子供の心配ばかりでグラスのことなど最初から気にしていなかったが。

掃除しているあいだに客が訪れた。依來は顔を上げ、厨房にいる直美と「いらっしやいませー」と声が重なった。直美が率先して四人客を、三人客のところから離れた席へと案内し、メニューを渡して厨房に一旦引っ込み、お冷を配った。

砕けたガラスの破片が集まったちりとりとホウキ片手に依來が厨房に戻った頃、直美が四人客からオーダーを取り、厨房で読み上げた。

「夏野菜とホタテのマリネのジュレ添え。ハマグリとアサリのブレゼ。ラングステイーンのカーネロニ、チョコレートトムースのアントルメ。お願いしまーす」

「アントルメそっちです、お願いします」

依來が指差したのは、厨房側から商品が取れて、フロア側から見えるようになっていた対面ショーケースだった。陳列されているいくつかの商品の中にチョコレートトムースのケーキが五つほど並んでいる。

直美はケーキを皿に盛り付け、付属のミルクティーを作ったあとトレーに置き、それをテーブルへと持っていった。

フロアから戻ると、依來がキッチンに立って鴨胸肉をフライパンで焼いている最中だった。ひっくり返した後、フライパンごと後ろにある業務用のオーブンに入れ、今度は小鍋を手に持ったかと思えば赤ワインを計量器なしで注ぎ、15gの計量スプーンで大雑把にすくったカシスピューレを六回に分けて投与し、とろ火で煮込みだした。また別の同じような小鍋ではキャラメルソースを作っている。

「なんか忙しそうですけど……」

何うように聞いたが、依來は気の抜けた表情を浮かべて、そうですか？ と聞いていた。

「僕は美咲さんからお前は忙しい方が良いからって言われてるので慣れたら忙しくもないんですよ」

そう言って笑った依來は、いつの間にか用意していた鶏モモ肉を油を引いたフライパンで焼き始めた。店長というだけあって調理師免許でも持っているのだろうか。気になったが片手間に、別の注文を手がけている店長にそう話しかけることも出来なかった。「そうだ。ジュレだジュレ」と独り言を呟くあたりが近寄りづらい。

メインを二品運ぶと未だ客が来た。二人客で子羊のショートロイン香草ファルス巻きという、手間が掛かりそうなオーダーだった。

引つ切り無しに依來だけが休憩なしで動きまわっていた。三人客が来て各々違うコース料理が注文に入る。前菜にサーモンのルーラード、トマトファルシ、帆立貝のサラダ。メインに牛フィレ肉のトユ

ルヌド、ローストビーフ野菜のジャルディニエール、牛テールの赤ワイン煮込みと、手間が掛かった。

客の入れ替わりが落ち着き、新しく来店する客がデザートを頼むようになり、メイン料理を作らなくなつてからは気がついたらディナー終了の三十分前になつていた。直美がフロア内で残っている客にラストオーダーを伝えに行った。

「今日は安座間さん来てないんですか？」

フロアの床をモップで拭きながら直美が言った。閉店十分前に残っていた最後の客が帰り、店内は静まっていた。

「ああ、そういえば今日来なかったですね」

厨房に立つ依來が答えたが、今日は特に忙しかったことを考えれば来なかった方が有り難いが、美咲は依來がいないとご飯にありつけない。何か思うところあつて外食で済ませているなら問題はないのだが、ふと落ち着きを払うと何故来なかったのか気になった。

「まあ、適当に済ませてるとは思ってますけど」

そう言った依來に直美は「あ、明日はランチで良いんですか？」と聞いた。直美としては「別にどっちでも構わないんですけど」ということだったが、依來は、ランチで結構ですよ、と笑って丁寧に断った。昼もそれなりに忙しいが、夜ほどではない。まさかとは思うが、

「安座間さんって料理出来るんですか？」とてもじゃないか経営者が手を貸すのかと直美の脳裏に過ぎった。あの男が接客している様

子すら想像出来ないのであれば、店長がフロアに回るのだろうかと思えたのだ。

「出来ませんよ。あの人多分、お米も炊けないんじゃないんですかね」

確か直美の二つ年上ではなかっただろうか。どういう家庭環境で育ったかなんて知らないが、米すら炊けないのは少し人間性を疑ってしまう。そうなんですか……。と引きつった声で相槌を打つ直美に、依来は片づけを初めながら「徳澤さん、もうあがって良いですよ」と話を変えた。

「後は僕やつときますんで。もう時間も時間ですから。ここらへん人気少ないから物騒ですし」

「ああ、じゃあ……。お先です」

手伝いを申し出ても案の定、いいですよ。とやんわりと断られるのがオチだ。腹の底が見えてしまわないように退散しようと選択した直美は深々と頭を下げ、更衣室へと入って行った。静まった店内にはしばらくしてから、直美が勝手口ドアを開閉する音がかすかに聴こえた。店内に流れるGuns N' Rosesの『Knockin' On Heavens Door』が改めて耳に届く。クラシックばかり流れていると思ったが、洋楽が流れていたことに初めて気付いた。

開店前に送ったメールの返事が来ていなかった。この時間帯は大体家において携帯を傍においてるはずだった。どんなに面倒臭がつても返事が一時間遅れることはない。電話を掛けても留守電に繋がるだけだった。

何もなければいいが、今になって背筋が気持ち悪くなった。誰もいないのに誰かがいるような気すらしてくる。今のマンションに引っ越して半年が経った頃、美咲がえらく真剣に「ここって誰がいるよな」と言っていたのを思い出した。そのときは「ええ、僕と美咲さんが」と返したが美咲は眉間に皺を寄せて「そうじゃねえよ」と怒っていた。

「俺ら以外に誰がいる。誰かが押入れとかクローゼットとか屋根裏とか毎日隠れてるところ変えて一緒に生活してるんだって」

美咲の部屋の本棚にあった江戸川乱歩の傑作選に『屋根裏の散歩者』が収録されていたのを思い出した。自分以外の誰かが一緒に住んでいると思いつく症状もあったような気がする。今なら美咲の気持ち解った。

厨房の掃除を終え、音楽を切って明かりを切り、更衣室に入った。堅苦しいカッターシャツとスラックスからシャツとジーンズに着替え、店を後にした。徒歩五分圏内にあるマンション『オリアクス』が見える地点では、最上階、角部屋1510号室のリビングの明かりが、絞まったカーテンから漏れていた。一応、家にはいるらしい。

二重になっている自動ドアの玄関を通り、ロビーを通ってエレベーターに乗り、最上階へと上がった。ランチを終えて一旦帰るときはたまに学生とすれ違おうが、午前一時近くになれば自分の足音だけが響き、誰にも会わなかった。

部屋の玄関を開けると、真っ直ぐ続く廊下の先のリビングはやっぱり明かりがついていた。廊下も電気が付けっぱなしで、廊下の真ん中あたりにある洗面所のドアが半開きになっていた。シャワーの

流れる音が聴こえる。風呂に入っているのは解るが、ドアが半開きというのは不自然だった。

「美咲さん？ 風呂ですかー？」

サンダルを脱ぎ、話しかけながら洗面所に向かった。半開きのドアから中を見ると、洗面所に置いた洗濯機はフタが閉まり、傍に置いたカゴには美咲が脱いだような衣類は入っていない。確かに浴室は明かりがついていて、シャワーは流れている。中に誰かがいるのは半透明のドアから見える。

バスタブの傍でしゃがんでいるように見え、服を着ていた。

「美咲さんっ？」

血の気が引いていくのを自覚しながら依来は浴室のドア勢い任せに開けた。

そこには、腕の間接の内側を通う動脈を刃物でえぐる様に切った美咲が、流しっぱなしのシャワーを浴びて、浴室の壁にもたれて気を失っていた。床を流れる水は真っ赤で、顔は青白くなっていた。

依来は美咲を前にしゃがむなり湯船の中から彼の腕を取り出し、圧迫点を指圧して止血した。動脈を切ったせいで天上にまで血が噴出し、壁にも掛かっていた。

流しっぱなしのシャワーの栓を伸ばした手で止め、全身の力を失っている美咲の身体を肩に乗せ、浴室から出た。

リビングのソファに美咲を運んだあと、電話で救急車を呼んだ。

十分程度でこっちに向かうと言われて電話を切り、静まった部屋の中で、ただ待っていた。

「なんでこんなこと……」

気を失っている美咲に語りかけるように声を落とす。握った手も、触れた頬も痛いくらいに、冷たかった。

「あともう少し発見が遅ければ危ない状態になってました。今のところ大事ないと思いますが、細心の注意を払って様子を見てあげて下さい。一応、精神安定剤を処方しておきますね。いま点滴してるので、あと一時間ほど経てば終わるでしょうから、明日に退院してもらって結構ですよ」

手術中の光が消え、運ばれた個室で美咲が寝ている間、依來を廊下と呼んだ医者がそう言った。元々色が白い方だった美咲の生気の薄い顔は、依來を不安にさせるのは充分で、大事無いと言われても気が抜けず、眠ることもしないまま美咲の傍でずっと起きていた。

点滴が終わったあと夜勤の看護婦を呼んだ。直ぐに来た年配の看護婦が眠っている美咲の腕に繋がった管を手際よく外し、依來に「お兄さんですか？」と尋ねた。依來の方が美咲より十センチ前後背が高く、肩幅もあった。というのも美咲が細身で実年齢より若く見えることも要因だが。

「ええ。弟がこんな夜中にすみません……。まさか自分で手首切るなんて思わなくて、なんか心配で……」

本当のことを言って関係に疑問を持たれることを嘘で避けながら胸中を語った。看護婦はふと笑い、そうですね。と同情している。

「簡易ベッド使いますか？ 持って来ますよ」

「ああ、大丈夫です。なんか眠れる気もしなくて」

そうですか？ と心配そうに部屋を出て行く看護婦を見送ったあと、依來はベッド脇に置いたパイプ椅子に腰を掛け、背にもたれかかった。

ぼんやりと時間が過ぎて行く中で、依來は美咲をただ傍観していた。

翌日、いつの間にか座ったまま寝ていた依來を起こしたのは美咲だった。ベッドに寝転がったまま手を伸ばして傍で座る依來の肩を揺すり、ハッと目を覚ましたところ「ここどこ？」と、まるで子供みたいに尋ねてきた。

「病院です」

「病院？」

理解した後、そう……。と溜め息と同時に返事した美咲は、身体を起こし、着替えは？ と脚を下ろして聞いた。鈍った反応をする依來はすっかり目をさまして立ち上がり、窓際にあるロッカーにしまった紙袋を取り出して美咲に着替えを渡した。

「先にお金払ってきますね。ついでに看護婦さん呼んできますから」

そう言っただけで部屋を出た依來は三階のナースステーションに向かい、そこで会計を済ませた後、昨日、依來に声を掛けた看護婦が詰め所から出て来て目が合ったので一礼し、美咲が起きたことを話した。

先に看護婦が美咲のいる個室へと向かい、依來は電話でタクシー

を呼んでから部屋に向った。部屋に戻ると着替え終わった美咲だけがいて、窓の外を見ていた。依來はベッドの布団を直し、美咲が脱ぎ捨てた服をたたみながら「看護婦さんは？」と聞いた。

「さあ。俺の様子見て、大丈夫そうですね、って言って出て行った。なんかごちゃごちゃ言ってたけど覚えてない」

ああそうですか、と返す依來に振り返った美咲は、帰るぞ。と言って横を素通りし、部屋を出て行った。後を追いかけるようにして歩く依來に、タクシー呼んでんの？ と声を掛け、ええ。と返事する依來に、あつそ。と素っ気無かった。

病院の玄関前に、タクシーは停車していた。後部座席に二人乗り込み、依來が行き先を伝えた。ここから三十分掛かる自宅へは、未だ体調が万全ではない美咲にとって長く、窓辺に寄り添って眠っていた。

マンション前に停車したタクシーから降りた美咲は先々と中へと入って行く。お金を払うのは依來だが、その財布は美咲のもので、好きに使えと言われていた。

最上階の角部屋三号室に帰り、サンダルを乱暴に脱ぎ捨てた美咲は、遅れて中に入る依來に「風呂わかして」と言い、リビングのソファにどっかり座った。当然、依來の顔色が変わる。

「え……、お風呂入るんですか？」

救急車が来るあいだ、ずっと美咲の傍にしていたし、病院にも同行したこともあって浴室は天上と壁に血痕がついたままだった。一日放置したくらいで汚れがこびりついて取れにくいこともないだ

ろつが、例え掃除をして殺傷性のあるものを全て除外した浴室でも、美咲をそこで一人にするのは気が引けた。

「あの、未だ掃除してないんで……」

「しろよ」

「あ、いや、でも……」

また自殺未遂起こされても困るので、とは言えず、口ごもった依
來に美咲は溜め息をつき、後で近くの温泉でも行くから、と言って
ベッドに横たわった。帰る前に飲んだ精神安定剤の副作用で眠気が
あるらしい。クッションを枕代わりにしてまぶたを閉じた。

静まった部屋で依來はソファの前に立って肘掛に置いたブランケ
ットを広げ、美咲に掛けた。

「美咲さん」

「なに」

「どうしてあんなことしたんですか」

酷く落ち着いた声だった。昨日はあれだけ気が気じゃなかったは
ずが、美咲が目の前で無事だということが何よりも安心に繋がった。

「もう少しで死ぬところだったんですよ」

母親が亡くなったことを聞いたとき、恐怖も不安も感じなかった
のに”手術中”の文字を見ると美咲のことしか考えられず、気が気

じゃなかった。何度も病棟の屋上に行つては普段吸わない煙草を吸い、落ち着きを払つていたが、手術中の光った文字を見ると動悸が上がつて気が狂いそうになった。

「あつそう」

それでも美咲が身体を依來に向けながら返した言葉は、冷たい一言だった。目を閉じたまままで話をしようとするスタンスはない。

「貴方が死んだら、僕はどうなるんですか。僕の父親が美咲さんから借りた金を返すまでここにいろつて言ったのは美咲さんじゃないですか」

話している内に声が震えてきた。無責任なことをするなと言いたいのだが、安易に美咲が死ぬかもしれない不安と恐怖が強かった。美咲が亡くなつたら自分はどうなるんだという不安もあつたかもしれないが、なにより美咲を失うことが怖かった。

依來がそれを声を抑えて訴えても、美咲は憮然とした態度で「俺が死んでお前に何か迷惑かんのかよ」と、相変わらずの悪態ぶりだった。やっと目を覚まして身体を起こしたと思えば、目は据わり、眠たいのを我慢している様子だ。目を擦る仕草はなんだかりスつぽくて緊張感がない。依來の焦燥感を全く無視している。

「むしろお前は俺がいなくなった方が好都合なんじゃないの。契約なんて法的なものじゃないし、このマンションだつてあの店だつてお前のもんになるじゃん」

「そついうことを言つてるんじゃないですよ」

早い切り替えしに美咲の顔が歪む。「馬鹿じゃねえの」と声を落とし、「なんでムキになつてんの？ 頭悪いんじゃない？ お前本当に気違いだよな。頭バグってんだろ。なんで？ なんてお前が怒ってんの？」と嘲笑混じりに文句を早口にまくし立てた。「お前が俺に口答えするな」と怒鳴って、怪我していない手で掴んだクッションを依來に投げた。

胸に当たって床に落ちたクッションを依來の素足が踏み、片膝がソファについた。背もたれの淵に手をつき、利き手の指先が美咲の耳元に触れた。

「あんたが死ぬのを黙って見てろって言うのかよ」

美咲すら聞いたこともない、低い声だった。感情任せの発言じゃなく、本心からの訴えだろうか、徐々に距離を縮めて美咲に身体を寄せる。今まで米搗きバツタみたいに美咲に頭を下げ、唯々諾々と言うことを聞いていた依來の高圧的な態度は、無意識に美咲の肩を竦め、顔を背けさせた。首筋に依來の吐息が掛かって鳥肌すら立つてしまう。

息を飲んで「それ以外お前に何が出来るんだよ」と返したが、思った以上に声が出せなくて、抑揚のない、枯れた声だった。

「俺の言うこと何でも聞くって言ったんだから、言う通りにして黙って見てたら良いじゃん」

力のない、か細い声で返す美咲に苛立ちしか感じなかった。

病み上がりの人間を抱く気すらなかったはずが、美咲が逃げようとしたせいか、咄嗟に依來の手が美咲の腕を掴み、押し倒した。

「だったら俺があんた殺しても良いのかよっ」

そんなこと出来る気もしないけど、それは嫌だって言ってほしい期待が少なからずあって、自分ごときに押されてやり返せないどころか、ただ逃げようとして顔を背ける美咲を、見ていられなかった。依來が思う美咲は、力で捻じ伏せようとするものなら、どんな報復を仕掛けてくるか解らない敵に回したくないタイプで、罵倒しながら殴り続けてくるか、子供みたいに後先考えず暴れて困らせてくるかのどちらかだと安易に想像出来た。

それが、今の美咲は大人しくて、腕を切った理由は一つしかないことが痛いくらいに伝わってしまう。嘘だって言っただけで、寝て起きたら腕の包帯がなくなっていることを祈らずにはいられなかった。

「別にいいよ。殺しても」

美咲の落ち着いた声に、依來は返す言葉がなかった。

「死ぬことが悪いことだとは思わないし、生まれることが善だと思わない。だから、生きることが良いとも思わないだよ。なんで生きてんのかなんて難しいこと言わないけど、誰も生んでくれなんて頼んでない。勝手に生んだくせに、俺がいるから自分は幸せだって、そんなん知るかよ。どう生きてどう死のうが俺の勝手だろっ？」

声が震えて、薄暗い部屋の中、美咲の目が潤んでいるのが見えた。目尻に透明な液体が溢れて、それが肌に伝って落ちていった。

無防備だった美咲の手が依來のシャツを握り締めて、今の表情を

隠すようにして俯き、掛ける言葉が見つからなかった。無意識に依
来の口の端が上がる。「なに言ってる……」と誤魔化しの言葉が口走
った。

「でもそれじゃ、」

「もう誰かの為に生きたくないんだよっ」

そう怒鳴った美咲は、身を守るようにして身体を塞ぎこみ、助け
を請うように依來にすがり付いて、まるで親から虐待を受ける子供
みたいだった。

「誰かに許してもらうために生きてるんじゃない、生きたい奴のた
めに生きてない、俺は母親のために生きたくない。母親を殺したら
楽になれると思ったのに、解放されると思ったのに、鏡見たら、自
分の声聞いたら、母親を思い出して動けなくなった。生まれたくな
かった。生まれなかったらこんなことにはならなかった。もう生き
たくない……。殺して。殺してよ。俺の言うことなんでも聞かって
約束しただろっ」

泣き喚く美咲に、どうしたらいいのか分からなくて、落ち着かせ
ようとしたわけではなく、普段の美咲に戻ってほしくて、美咲の口
を依來の唇が塞いだ。普段なら暴れて離そうとするだろう。舌を絡
ませようものなら脚を使って反撃に出るだろうと思った。

今の美咲は何もしてこない。病み上がりということもあるが、依
来のなされるがままで、身体に従順なわけではなく、元々反抗の意
志がなかった。

漠然と、美咲に抱いていた強者のイメージが崩れていった。けど

それは、依來が勝手に美咲に対して、そうであってほしい。と願っていただけで、實際の美咲は無力で、何も出来ない子供同然に非力で、脆くて弱い人間だった。

美咲が泣きやむまで、身体を交し合った。

携帯電話の目覚ましでセットした八時半にIncubusの『Anna Molly』のサビが流れ、依來が目を覚ました。直ぐに止めたはずだったが、隣で毛布にくるまって眠っていた美咲まで起きてしまった。寝ぼけ眼を浮かべて「いま何時……？」と掠れた声で聞く。眠りが浅かったらしい。

「八時半です」

「起こすなよ」

「……すみません」

お前が勝手に起きたんだろ、と文句を言う気も起こらない依來は再び目を瞑った美咲の茶髪を撫で、体を起こした。そのとき美咲が未だ掠れた声で「今日、定休日じゃなかったっけ」と聞く。

「明日ですよ」

「俺が今日にしろって言ったら？」

「今日にしますけど。美咲さんの店ですし」

「じゃあ今日にしといて」

「どこか出掛けるんですか？」

「別に。今日何もしたくないから、ご飯食べるにしても自分で作るか店行くかのどっちかじゃん。動きたくない。何もしたくない」

そう言って美咲は、とりあえずもう一回寝る。と言って話すことをやめ、静かに寝息を立てた。早えなあ……、と素で言葉を零す依來は掛け布団を美咲に掛けて、自分はベッドから降りた。

美咲が病院から帰って来た日から十日以上経ったが、あれから美咲は自ら何かをする気力が失ったように動かなくなつた。一日の大半を赤ん坊みたいに寝て過ごし、ご飯を食べてはソファで寝転がり、たまたま近くにあつた雑誌で見掛けた美味しそうなケーキを依來に作れと無理強いし、それを夜中に食べては風呂に入つて寝るといふ生温い生活が続いている。依來は仕事があるので自分が家にいないときも美咲がずっとそうであると断定は出来ないが、昼の営業時間を早めに切り上げて不意打ちで帰ってきてても美咲はベッドで寝ているか、ソファで寝ているか、ソファで寝転がって何かを食べているか漫画か雑誌を読んでいるかのどれかで、まるで人が変わったように大人しく静かに過ごすばかりだった。散らかつていない部屋を見ればいかに美咲が依來のいないときでも殆ど動いていないかが解る。

「あ、おはようございます。朝早くに失礼します。舞川です。徳澤さんの携帯ですか？」

寝室を出て洗面所で顔を洗って歯を磨き、自室に入った依來が先にとつた行動は直美への連絡事項だった。携帯電話の向こうから直美の「ああ、おはようございます」と微妙に寝起きっぽい声が届く。

「すみません、今日僕に用事が出来たのでお店お休みします。明日、

直美さんシフト入ってないですけど、差し支えなければ明日に出勤
お願い出来ますか？」

「明日ですか？ あ、ちょっと待って下さい」

何か物音が聞こえてくる。紙をめくるような音が数回聞こえて直
美の「あ……」と溜め息に似た声が届く。予定が入ってて無理かと
予想した矢先、「すみません、先約があります」と予想通りの返答
だった。

「本当に申し訳ないです」

「いえ、こちらの都合で今日お休みなので。こちらこそ突然申し訳
ないです。明後日は通常通り営業しますから時間通り出勤お願いし
ます」

我ながら事務的な話し方だなと思いつつ一通りの挨拶を済ませ
て依来は電話を切った。明後日は通常通り店を開けると言ったもの
の、美咲のあの様子を考えればまた今日休みにしろと言いつつも
しれない。その要望に応えたい気もあったが、それが高じて何の関
係もない直美に迷惑が掛かるのは避けたかった。それが何度も続い
て直美が辞めると言ったらまた新しい人間をいれなければならぬ。
美咲は依来の責任だというのが、今まで勤めてきたバイトは美咲のこ
の我が侷さのとばっちりを受けて辞めているのだ。バイトに連絡を
入れるのが依来であるため、直接接触のない美咲の我が侷だとバイ
トは気付きもしない。

溜め息をついた依来は携帯を机の上におき、自室を出てキッチン
に入り、自分の朝食をつくった。といってもトースターで食パンを
焼き、インスタントのクラムチャウダーを温めるだけだったが。

五分でつくった朝食を十分で済まし、しばらくテレビを観たあとに洗濯物を洗い、ベランダの日干した衣類を取り込んでたため、掃除機をマナーモードにして掃除をするという若干、主婦のようなことをしていると時刻は十一時を過ぎていた。特に趣味も持ち合わせていない、持っていても意味がない依來は美咲のために時間を使っているようなものだった。

このあいだ美咲が言った台詞は、依來にとって聞きたくない言葉だった。母に愛されることもなく捨てられ、父親に裏切られた依來は美咲に出会ってからずっと、美咲のために生きてきた。美咲の我が侷なら、なんでも許せた。

美咲が生きることを拒んでる。美咲が生きることを拒否することは、依來自身をも拒絶しているように思えてしまう。

溜め息をついて考えてしまうことを払拭した依來は掃除を終わらせてから掃除機を定位置に戻し、南向きのベランダに出た。サンダルを素足に引っ掛け、ウッドテラスに置いたアメリカンスピリッツのメンソールを一本取り出して火をつけて紫煙を吐く。ここ何日かは一日に一箱吸い切ってしまう程の頻度で煙草に手をつけていた。落ち着かない。寢室を何度覗いても美咲は寝てるし、妙な想像をして傍まで行き、寢息を確認してしまう。その行動と喫煙の繰り返し返しが最初の三日間続いた。

一本吸い切っては二本目を吸い、そしてまた三本目、四本目と吸い続けた。五本目を取り出すとき、それが最後の一本だと気付いて、それを抜き取って箱を潰した。

貴重な一本を吸いきったあと、ベランダを出て網戸を後ろ手で閉

め、寝室に向った。ドアを開け、確認をすると美咲に起きる気配はなかった。昨日、美咲は二十時から夜中の零時まで「何もしたくない」とか言いながらゲーム（戦国BASARA）をしていた。そこから風呂に入り、髪は半乾きの状態で一時にはベッドで眠り始めた。現在、十二時半。今の時点で美咲は一瞬起きたが半日眠っていることになる。

ドアを閉め、依來は玄関先でサンダルを引っ掛け、下駄箱の上に放置された美咲から渡されている財布と家の鍵を手に取り、部屋を出た。

玄関扉を開け、廊下を歩いてエレベーターへと向う。よく考えれば今日は平日で、昼間は人気がなかった。たまにすれ違う住人とも一切会うこともなく一階へと降り、マンションの前にある煙草屋へ出向く。

「アメリカンスピリッツのメンソール、ツーカートン」

煙草屋の間口で座って客を待つ年配の女性に注文すると「九千二百円ね」と言いながら、足元にあるらしいダンボールから在庫を取り出し、レジ袋にツーカートン入れていた。依來は一万円を払い、先に商品を受け取る。そのとき、やけに女性の視線が痛く感じた。完全にこつちを凝視している。まるで依來の支払ったお金が偽札だったみたいだ。生憎そうだったセコイ詐欺をするほど暇ではないが。

「お兄さん、どっかで見たことあるんだけど、どこだったかしら？」

「近くのカフェで働いてますので。よろしければ今度お食事に来て下さい」

「私足悪いから外食することないの。どこだったかしら……？ もしかして芸能人？」

「まさか」

シナを切るように言い返す依來はお釣りを受け取るなりその場を足早に離れた。

「あ、どこ行ってんだよ」

角部屋一五〇号室の玄関扉を開けるなり、真っ直ぐ伸びた廊下の先にあるリビングから美咲が顔を出し、第一声を放った。サンダルを脱ぐ依來の仕草がとまり、目が見張る。あ、起きたんだ。と、そつちで驚いたらしい。

リビングへと向いながら「煙草買いに行ってたんです」とレジ袋を見せながらリビングに入った。聞いておきながら美咲は「お腹すいた」と全く関係ないことを話してくる。テーブルに荷物を置いた依來は「何食べますか」と聞きながらキッチンに入った。

「美味しいもの」

「個人差あるでしょ」

「ラーメンかピザか焼肉か寿司」

「ラーメンは麺がないですし、焼肉と寿司は外食になりますよ。ピザなら今から頼めば多分、三十分くらいで来ると思いますけど」

「じゃあピザ頼んで」

「チラシは？」

「いや、寿司はいいから」

「ちらし寿司じゃなくて。ドミノピザのチラシピザにありますよ。」

「なんで俺がそんなん知ってんだよ」

「美咲さんよく見てるじゃないですか」

「片付けてんのはお前じゃん」

「あちこちどっかに持っていくのは美咲さんですよ」

「知らない」

「じゃあ頼めないじゃないですか」

「役立たずめ」

俺のせいだよ、とも言えず、依來は「他に何か食べたいのありますか」と聞いた。美咲は「じゃあモスバーガー」と作れるはずのないものを注文する。

「買いに行けっことですか」

「うん」

「何にしますか」

「ダブルチーズバーガーのモスチキンセットで、クラムチャウダーね。あとホットドッグと、ポテトのLサイズとチキンナゲット。あ、ソースはバーベキューで。あとバニラシェイクとジャスミン茶」

「そんな細い体のどこに入るんですか。美咲さんって本当に太らな
いんですね」

「お前だってそうだろ」

「僕は美咲さんほど食べないですから太らなくて当然ですよ」

「あつそ。いいから買って来いよ」

吐き捨てるように言う美咲はそっぽ向いたようにその場を離れ、ソファにどっかりと座って依來に背を向け、テレビを観始めた。それほど興味あると思えない芸能ニュースが流れている。

「じゃあ、行って来ます」

「あ、ついでに薬局寄ってきて」

「何いるんですか？」

「ハーバルエッセンスのなめらかムースのシャンプーとコンディショナー。ヴォルビックと雪肌精の洗顔料、日焼け止め。それからコンドームとフリスク。デオドラントスプレー、あとルシードエルのワックス」

「ゴムは未だありますよ」

「藤井さんから貰ったやつだろ。あれ全部に穴開いてるんだけど」

「え、本当ですか？ てか確認したんですか？ そもそも色々間違ってますよね」

「このあいだ眠れなくてお前起こしてセックスしようと思って一応確認したらそんな感じだった。お前が買ってきたやつはもうないし。藤井さんは俺らをどうしたいの」

「解りかねますけど……」

なんとなく答えを導き出すと恐ろしいことになりそうだったので二人は話すのをやめた。沈黙が流れ、しばらくして依來が「じゃあ、買ってきますから」と踵を返し、美咲は、はよ行け。と悪態をつく。

近所といえどもマンションの直ぐ手前というわけではないので依來はリビングを出た後に自室に入り、ドアを閉めて黒のスエットと二年前に買ったZARAのシャツからヒステリックグラマーのシャツとエドウィンのジーンズに着替え、ジーンズの後ろポケットに携帯帯を突っ込んで自室を出た。玄関先でサンダルを引っ掛け、じゃあ行って来ますね。と下駄箱の上に置いた財布を手に取る。廊下の先のリビングから美咲の「んー」と等閑な返事が聞こえる。

部屋を出てエレベーターへと向かい、ボタンを押して最上階まで来るのを待った。しばらくしてドアが開くと、その瞬間から女の子の若々しい声が響いた。ドアが全開になったところでその声が女子高生三人のものだと知る。彼女らは依來を見て声を抑えた。そのうちの一人（おそらくマンションの住人）が「こんにちは」と挨拶をするので依來は義務的な口吻で挨拶を返し、彼女らと入れ違いにエ

レベーターに乗り込んだ。ドアが閉まるまで彼女らの声が届く。

降下していくエレベーターの中で溜め息をついた。

一階に止まってドアが開き、出てから駐輪所に向かおうとしたが自転車の鍵を忘れていたことに気付き、正面玄関からマンションを出た。二重の自動ドアを超えて煙草屋から数歩先にある薬局に向う。

「以上で八千九百三十二円です」

頼まれた品を全て買うとその値段だった。依來は一万円と三十二円を払い、吊りを受け取って、二重にしてもらった袋に詰め込まれた商品を手に取り、薬局を出た。これから美咲の昼ごはんを買いに行こうと進路方向に向ったとき、携帯が鳴った。手に取ると美咲だった。

「はい」

「パンとか作ったことある？」

何て脈絡のない切り出しだろうか、美咲が唐突に話を切り出すにも慣れてきたと思っていたが、どうせ追加注文だろうと先入観があったせいで返事が鈍った。

「は？」

「ホームベーカリーでも買おうかと思う今日この頃」

「はあ……。別に良いと思いますけど」

「あそ。じゃあ買うからお前作って」

どうせそんなことになるだろうと予想は出来ているので依來は適当な返事をして電話を切った。わざわざそんなこと電話で聞くこともないだろうに。苛立ちはなかったが妙に気になった。

定休日を変えろと言われ、たいしたことのない用事の電話をしてくる。依來が煙草を買いに行ってる間、美咲は依來を捜していたのだろうか。

美咲は死のうとして手首を切ったのだろうか。美咲は救急車を呼んだ依來を責めなかった。自殺願望があったのなら未だ生きていることに対して嫌悪感や助けた依來に対して美咲なら文句を浴びせても可笑しくない。

何かを訴えてるかもしれない。

ハツとした。美咲がずっと何もしない日々が続いたせいで危機感が薄れつつあった。いつ彼が自分で自分の命を絶つか解らない。さっきの何の変哲もない電話が最後だったら、今の会話に何かのメッセージがあるとは思えないが、妙に胸騒ぎがした。

勘違いであれば良いと期待もあり、依來は薬局から少し離れた場所のモスバーガーへ向い、そこで美咲の食べる分を注文した。量が量なので待っているあいだに美咲にメールを送ると直ぐに返事があった。依來の送った内容が あんまり安いホームベーカリーはやめといった方が良いでしょう という、それこそどうでもいいものだったので美咲からの返信も 八千円だった と短かったが。

「てかもう買ったのかよ」

店内で小声ではあったが、つい声がもれた。

商品を受け取り、半ば急ぎ足でマンションへと帰った。エレベーターを上がって廊下の突き当たりに向う。玄関を開け、サンダルを脱いで真っ直ぐリビングに向かうと美咲がソファに仰向けに寝転がり、DSで遊んでいる姿があった。帰って来た依來に気付いて「お帰り」と返している。

「すみませんね、待たせてしまつて」

「別に。そんなに待つてないけど」

はあ、そうですか。と返しながら依來は薬局のレジ袋とモスバーガーの紙袋をコーヒーターブルに置いた。美咲は体を起こし、モスの紙袋を開けて中の商品を全て出した。

「これだけ？」

「何か忘れてますか？」

「お前食べないの」

「ああ……。お腹空いてなくて……」

「そんなんだからお前の顔には生活感がなさ過ぎるんだよ。誰にでも美人とか言われるから調子乗ってんだろ」

「なんですか急に」

「たまにお前の顔を見るのが嫌になるときがある」

「それは、すみませんとしか言いようがないというか……、あの、それって僕はどうしたら良いんですか」

「整形でもすれば」

「そんなお金あったら美咲さんに返しますよ」

「一生掛かっても返せない額だけだな。今もこうやって話してる間に借金増えてるし。お前も変な父親持ったな」

「そういえば美咲さんのお父さんのことは聞いてないですよね」

「俺の親父はどうしようもないクズでアホなりに多分どっかで生きてると思う。誰かに殺されてなかったり病気になってない限りは」

「一緒には住んでたんですか？」

「俺の母親とは少しの間だけ住んでたと思う。けど少ししてから浮気相手と逃げて、嫁に判を押しした離婚届を送ったんだよ。頭悪いんだか要領悪いんだか、だったら最初から結婚とかすんなよって思わねえ？」

「ですよね」

「どうせ父親だってあの女のことは好きじゃなかったんだよ。俺だつてあんな人に依存してばかりの女、大っ嫌いだよ。だから殺したんだけど」

そう言って笑う美咲はソファから降りて、テーブルを前にあぐらをかき、あつたかいハンバーガーを手にとって封を開け、食べ始めた。最初の一口で口の端にソースがつき、バーベキューソースの封を開け、それをディップしたチキンナゲットを食べると、ソースをテーブルに零した。バナシエイクを飲もうにも上手くストローがさせず、依來に「さして」と要求する。

脱力したように美咲と向かい合ってテーブルを前に座った依來は、言われた通りバナシエイクにストローをさし、それを美咲に返した。テーブルに載せたままの薬局のレジ袋をじゅうたんに置き、美咲が食べている姿を何も考えずにただ視界に入れている。

「お父さんのことは嫌いじゃないんですか」

「だって知らないもん。興味すらないし」

ああそうか、と納得する依來は、自分も確かに母親より父親の方に嫌悪感を抱いているのは、少なからず母親よりは信頼していたからだ。

「けど父親があの子に墮ろせって言ってくれたら良かったのになとは思っ」

その発言に依來は声も出さずに美咲に視線を寄越した。

「美咲さんは生まれなかったことになりますよね」

「前に言っただろ。俺は好きで生まれてない。あの子が頭の悪い男とゴムなしでセックスしたから俺が出来ただけだろ。きつと母親は愛する人との間に子供がほしい程度にしか考えてなかったんだろ」

けど。アホだな。救いようがない」

「僕は、美咲さんがいてくれて良かったですけど」

「お前も勝手なこと言っただな」

美咲の呑気な声色が変わった。目つきが鋭くなり、食べる手を止める。外から聞こえる鳥の鳴き声がやけに耳についた。

「もし俺が女でお前の子供身ごもっても絶対、おろすけどな」

「美咲さんが女でも僕に止める権利はないでしょうね。多分、こういう関係じゃないと僕は美咲さんと会ってないですから」

「運命とでも言いたいのか？ そんな良いもんじゃねえだろ」

「けど僕は美咲さん好きですよ」

「どさくさに紛れて告白かよ。嬉しくねえし」

「あー、じゃあ愛してるとでも言いましょうか」

「おちよくってるよな、俺を」

「照れ隠しですよ」

「ウザ。死ね。ムカツク」

今までとは逆に依來が呑気に喋っていた。美咲がそういつときの依來は特に気分を毛羽立たせることもなく、普通の態度だが、美咲

は相手が優位な立場にいると感じると不機嫌そうに語気を強めてしまふ。依來の酔ったような口調で話す「あ、じゃあ夜になったらベランダで夜景見ながら言いましょつか？」という提言にも美咲は「いらん。死ね」と暴言を吐く。

「じゃあベッドで言いますよ」

「それで俺が喜ぶと思ってんのかよ」

「別に喜ばそうとしてないですよ。本心を言っただけですから」

「嘘つけ」

「本当ですって。あなたの為なら、何でも出来る自信あるんです」

Distance

少し開けた窓から入り込んだ風が揺らすカーテンの微かな音で目を覚ました美咲は、今自分がどこで寝ているのか解っていないかった。珍妙な夢の中での自分はロシアの宮殿でカツ丼食べてる最中だったが、今の目の前には純白の枕が視界にあるので、ここは寝室のベッドで依來は既に仕事に行った後だと数秒経って気付いた。

昨日の夜は依來が店で作って持って帰って来たバジルと完熟トマト、モツツアレラチーズがふんだんに盛り付けられたマルゲリータ、ローストビーフのグリーンサラダ、パンプキンスープを食べたあと風呂に入り、リビングのソファに安座してテレビを観ていたまでは覚えているが、テレビの向こう側の芸人が昔の彼女を暴露されたとうでもいい展開から記憶がなくなっていた。ベッドには依來が運んだのか、それか起こされて文句言いながら自力でベッドに戻ったか、何一つ覚えていない。

あの番組が零時頃に始まったのは知っていた。だとしたら午前一時前に美咲は寝ているはずだが、手をヘッドボードに伸ばして携帯を手に取り、サイドボタンを押してサブディスプレイに映った時刻を見ると十五時だった。今で十四時間ほど睡眠をとったというのに未だ眠らなかった。最近は適度な運動もせず、ただ寝て、食べて、疲れてもないのに風呂にはやけに浸かり、そして眠るという繰り返しだった。

何かしたいという自発性も起こらない。そもそも美咲は昔からあれがやりたい、これがやりたいと思って多少し自分の思い通りにいかなければ直ぐに諦めて手を引くことを繰り返して、いつの間にか何がやりたいと思うことも少なくなり、今の美咲は無気力を具現化

したようだった。

寝返りをうち、毛布と布団を首元までかぶりなおして目を閉じた。

自分の一番古い記憶を思い出した。小学校に入学した頃、朝早くに起きてわざわざ家を出て勉強をしに行くわけの解らん『学校』というものが大嫌いで入学二日目に美咲は母親に「行きたくない」と愚図った。普遍的な母親なら行きなさいと叱るだろうが、美咲の母親は美咲の無断欠席と遅刻を容認した。それがあつて小学校六年間の出席日数をトータルすると二百日ほどしか登校せず、中学に至っては三年間で七十日間、高校は三流の私立校に進学して僅か三回目の登校で自主退学した。

小学生の内から登校しても授業態度が悪くて教師に怒られては反抗し、しまいには殴り掛かって教員達のあいだでは腫れ物のような目で見られた。中学や高校では上級生が美咲を「生意気」だと目をつけ、喧嘩も頻繁に起こった。

先生の言う通りにする意味が分からない。学校で勉強をする義務が解らない。一つ二つ生まれが早いだけで敬語を使う必要を感じない。なぜ自分の意見が通らないのか、どうして自分の意見を聞いてくれないのか納得がいなくて母親にそれを何度も訴えた。母親は美咲の訴えを親身に聞いて「やりたくないならやらなくていい」と言い、二言目には「あなたは他の子とは違う」と続け、育ち盛りの息子を存分に甘やかした。

昨日の夜、かなり遅い晩ご飯を食べながら依來に「もうすぐ誕生日なんだけど」と話を振った。依來は今更何言ってるのと言いたげに「ええ、そうですね。おめでとうございます」と返しながら、あまりご飯を食べていなかった。

正直、誕生日なんてどうでもよくて、美咲が言いたかったのは依
来の反応、「その敬語って抜けないのか」という疑問だった。依来
としては美咲が四つ年上なので「抜いても良いんですか？」と逆質
問になっていたが。

「怒ったときにタメ口になるよな」

「怒ってるのに敬意を払うってどないですか」

「なんか敬語って胡散臭いよな」

「まあ、そうですね。同等の立場じゃないから敬語を使いますし」

「ああ、そういうことが」

「好きで敬語使ってると思ってたんですか……」

「うん」

はつきりと頷いた美咲はピザのオリーブオイルでベトベトになっ
た手でスプーンの柄を握り持ち、パンプキンスープを飲んで「俺、
敬語とか嫌い」と話した。好きな奴いねえだろ。と胸中で毒づいた
依来はそれを隠しきれずに「そうなんですな」と言いながらもそれ
ほど意外と思っていない言い方だった。どちらかというところ『そう
でしょうね』と言っているような顔つきだった。

「そうやって本音隠せるから敬語使ってるの？」

依来が瞬時に建前で反応したことを美咲は素っ破抜いていた。別

に顔つきや言い方で見抜いたわけではなく、依來が慢性的に建前で話をしてしまう癖があると知っていたからだ。今も美咲が聞いた質問を「そんなことはないですけど」と敬語で建前を話している。

「別に怒ってないから本音話したら？」

「でも美咲さんに本音言ってもどっちも得しないですよ」

「なにそれ」

「僕は美咲さんが自分を傷つけて怒ったんですよ、建前で怒るって出来るわけないから、それで僕の本音が解りますよね」

理解した美咲は、うん。と返事して口周りについたスープを拭うこともせず、野菜をよけてローストビーフを食べ続けた。そのあと風呂に入ってソファで眠ってしまったのだろうが、そのとき家の用事をしていた依來が美咲に話しかけてくることはなかった。かといって美咲から依來に話しかけることもしなかったが。

母親は話をすれば美咲を褒めるばかりで、依來は美咲を傷つけないように婉曲した言い回しで話をする。やり方は違っても美咲のことを最優先しているのは二人とも同じだった。自分を犠牲にしているわけじゃないだろうけど、母親は美咲を持ち上げて、依來は自分が謙り、美咲を擁護していた。それが嫌というわけじゃないが、そういう話し方をする依來を見てつい母親のことを思い出してしまう。

ハツとして起きると時刻は十五時になっていた。あれから一時間ほど眠ってしまったらしく、美咲はやっと体を起こしてベッドから降りて寝室を出た。

廊下の右側にある洗面所に入り、二、三度うがいをして洗面所を出てキッチンに入ると流し台の横のカウンターに依來が仕事に行く前に作り置きした美咲のお昼ご飯だか朝ごはんが用意されていた。コンロには片手鍋に入ったクラムチャウダー、ラップに保護されたフレッシュチーズのモッツアレラとポロニアソーセージとトマトを挟んだパニーニ、皮を剥いて一口大にカットしたグレープフルーツ。その下に『アボカドジュースが冷蔵庫にあるので飲んで下さい』と書かれたメモ用紙が挟まれている。東芝の冷蔵庫を開けると、密封瓶に保存されたアボカドジュースが扉の内側に入っていた。美咲はそれと、戸棚からグラスコップを取り出し、用意されたそのご飯を四人掛けのテーブルではなくリビングのコーヒートーブルに置き、ソファに安座して食べ始めた。リモコンでテレビをつけ、液晶画面の向こうでは芸能リポーターが実に興味のない芸能人同士の夫婦生活の事細かに話しているのを全く聞いていない。

出されたものを全て食べる習慣はなかったが、パニーニは美咲にとって美味しかったらしく、三つ全てをたいた上にグレープフルーツ、クラムチャウダーも全てお腹に入れると流石にお腹がきつくなり、ソファでうつ伏せになって横になった。腹痛はないが少し苦しくて動き辛い。

小学生の頃に好きなものを食べ過ぎてお腹が痛くなり、ソファで寝転がっていたことが何度かあった。美咲の母親は整腸剤を美咲に飲ませて、まるで不治の病にでも掛かったかのように美咲を心配した。

依來と暮らすようになってから、初めて食べ過ぎて気分が悪くなった。依來が徐々に美咲の好きな食べ物を把握してきたせいだろうか。もしここに依來がいたら、彼も母親みたいに整腸剤を用意して美咲を心配するのだろうか。

昼のワイドショーから再放送のドラマに画面が変わり、話の導入部分が終わった頃に玄関先から鍵の開く音が聞こえた。靴を脱ぐ音がして廊下を歩く音が響き、リビングのドアが開いた。ここ連日、美咲はソファにだらけてばかりなので見た感じいつも通りの風景だったため依來は「あ、ただいまです」と普通に返した。

「お帰り」

「どうしたんですか？」

「食べ過ぎた」

「お腹痛いんですか？」

「気持ち悪い」

「枕いりますか？」

薬じゃないんだ、と思いながらも美咲は、うん。と頷いた。依來は「持ってきてますね」と言ってダイニングのテーブルに荷物を置き、一旦部屋を出た。直ぐに戻ってきた彼が持って来たのは、寝室に置いている二人が使っていない枕と常温水と整腸剤だった。枕を美咲の頭元に置き、散らかったテーブルに水と薬を置いた。

「飲めますか？」

「うん」

返事しながらも一切動いてない。

「手伝いましょうか？」

「どうやって手伝うんだよ」

「口に入れて水を飲ませるって普通のやり方と、あと僕が薬と水を口に入れて、それを口移しで飲ませるやり方もありますけど」

「自分で飲むからおいといて」

「早めに飲んで下さいよ」

そう言っただけで依来は横になっている美咲の頭の下に手を入れて少し持ち上げ、隙間に持ってきた枕を入れ込んだ。一切動いていない美咲は「なんか枕高い」と文句だけは言う様子で、依来は「変えましようか？」と聞いたが、「もうこれでいい」と面倒臭い奴だった。

「食べた？」

「ん？」

「昼ごはん、食べた？」

「未だですけど」

「残せば良かった」

「残飯処理かよ」

「俺が食えって言ったら食うだろ」

「まあ、そうですね、でもお腹空いてないんですね」

なんて言いながら力なく笑う依來を美咲は繁々と視線を寄越した。元々顔は小さかったがより小さくなり、引き締まった体の筋肉が少し落ちて鎖骨が浮き出ているように見える。依來の食生活まで把握しているつもりはないが、そういうばここ最近、あまり食べていないような気がした。

「痩せたよな」

「二、三キロほど」

「なんで？」

「なんでって……、食べてないからだと思えますけど」

「食えよ」

「食欲ないんです」

「性欲もなかったら食欲もなくなんのか」

「セックスしてないのが原因じゃないですから」

「なら良いけど、軽い運動したら少しは腹減ってご飯も食べれるようになるんじゃないの。お前だったら、ボクシングとか」

高身長の有利さで選んだのか知らんがヘビーな競技を提言してきたところで依來は無意識に半笑いになって「もっと気軽に出来るも

のあると思っんですけど」と返した。

「サッカーか野球」

「一人じゃ出来ないですよ」

「水泳、ジョギング。あ、登山」

「最後は気軽にやったら餓死しますよ」

「丁度良いじゃん。お前だって死にたがってたし」

去年のことを話してしているみたいだった。一瞬、依來は何も反応が出来ず一種異様の表情を浮かべ、止まった。直ぐに冗談でも飛ばすように「そんなこともありましたね」と口の端を挙げたが美咲はそんな誤魔化しも意に介さず依來を真っ直ぐ見据えて「未だ死にたい？」と、何かを期待しているような口調で聞いた。

「今は、場合によります」

「お前、このあいだ俺の為なら何でも出来るって言ったよな」

依來は顔色ひとつ変えずに「ええ」と肯定の返事をした。美咲はソファに手をつけて体を起こし、ソファに片膝乗せて半分座っている依來と視線を合わせた。

「お前の方が先に死にそうな気がする」

「先につて、美咲さんが近い内に死ぬみたいじゃないですか」

「てかもう死んでるはずだったけど」

「やっぱり助けて欲しくなかったですか？」

「さあ、お前を責める気になれないってことはそうは思っていないんじゃないの」

そう、と声を落とした依來に美咲は眠たいのか、顔を俯かせて目を擦りながら「なんか最近、昔のこと思い出すんだけど」と話を交えた。

「昔？」

「母親のこと。俺が学校行きたくないって愚図ったら毎日、学校に電話入れて休ませてくれて、毎日俺の好きなもの食べさせてくれたし、学校に行ったら欲しかったオモチャとかゲームとか買ってくれて、宿題とか全部母親がやってたし、次の日の用意とか、なんか全部、母親がやってたなって」

声のトーンが高くなって、微かに震えていた。小動物みたいに目をこすっていた仕草をやめて顔を上げた美咲の目が少し赤くなっている。

「美咲さん、本当はお母さんのこと好きだったんじゃないですか？」

「小さい頃は。今は昔ほど好きじゃないって、むしろ嫌いで、なのに、なんでかな、思い出したら母親のことが頭から離れなくて……」

不意打ちのように涙を零した美咲はそれを拭うこともせず、諦めたようにゆっくりと肩を落して顔をまた俯かせた。

「母さんに会いたくなかった」

子供のような、たどたどしい声だった。ふと顔を上げると目を真っ赤にして容赦なく涙が溢れ出し、今の美咲は二十四歳の成人男性どころか、三歳の小さな男の子のようで、我慢出来ないみたいに泣きだした。

「お前が俺の言うこと聞けば聞くほど、母さんのこと思い出して何もしたくなくなる。俺が殺したのに、なんで会いたくなるのか解らないけど、会ったってきつと苛立ってまた殺すんだろうけど、会いたくなつて……」

依來のシャツを掴み、頭を依來の肩に預けては身を縮こまらせ、泣くのを堪えるみたいに肩を震わせた。「なんで、なんで、なんで……っ」と甲高い声で繰り返して、シャツを掴む手に力が入る。

「母さんに会わせて」

一瞬、依來の目には美咲が子供に映った。シャツを握る手が小さく見えて、肩も小さい。日に当たって遊ばないから雪をあざむく肌をした栗毛の髪が跳ねた小さな目の前の子供は、そのまま大人になつて何も出来ない人間に育ち、それでも自分は何でも出来て人に優遇されることを当たり前としている王子様のような存在だと信じて疑わない。

ハツとして美咲を改めて見る依來には、美咲の体が小さく見えたままだった。あれだけ食べて寝る日々を送っていたはずなのに触れた肩は細くて、体温が低い。まるで生きていないみたいだった。

「どうせ生まれてくるくらいなら子供のままでいたかった。子供のままなら母さんのこと好きでいられたのに……、大人になりたくなかった。なあ、なんで母さんは俺のこと生んだと思う？　こんな世界、生きていくほど価値もないって解るのに、なんで俺のこと生んだと思う？」

美咲の刺さる言葉に、依來は何も返せなかった。それは……、と無意識に声が出ても続きが出てこない。愛してるから、会いたいから、守りたかったから、なんて心底思ってもいない陳腐な言葉ばかりが出てくる。自分だって美咲と同じように何度もそやって母親を憎んだのに、今の美咲の気持ちが解らないはずがないのに掛ける言葉が見つからない。

依來の中で僅かにあった『自分の子供を溺愛する母親』像に羨望が、無意識に言葉を放った。心底思ったわけじゃないけど、どこかで思っていた。

「けど美咲さんは、母親に愛されてたじゃないですか」

「母さんは俺のことなんて愛してなかったっ。自分の味方が欲しくて、自分が一人になりたくなかったから俺を生んだんだ。だから俺がいて幸せだとか言うんだ。人の気も知らないで、何が俺しかいないだよっ、俺のこと何も知らないくせにっ」

怒鳴るように声を上げ、子供みたいに泣き続ける美咲を、依來はあやすように胸に抱き寄せて強く抱き締めた。美咲の手もシャツではなく依來の肩を強く掴んだ。

「もう母さんのこと思い出したくない。お願いだから殺して」

「そんなこと出来ない」

「言うこと聞くって言っただろ？ いいから殺して、お前が殺してくれないとまた自分で腕切るからっ」

「切ったってまた助けますよっ、母親のこと思い出したくないなら思い出さないように僕がなんとかします。美咲さんは好きなようにして良いし、僕が何でもします。だから……、だから美咲さんのこと何でも教えて下さい。何が嫌で何が良いのか、教えてくれたら、あなたが生きやすいように僕が動きます」

その言葉に泣く声が弱まった美咲の髪を依來の手が撫で、ソファにゆっくりと寝かせた。また髪を撫で、低い声で「美咲さんは我慢しなくていいから」と続けた。

美咲はゆっくりと頷き、泣き疲れたのか、すっと目を閉じて眠った。依來はテーブルに置いたティッシュを数枚取り、涙で濡れた美咲の顔を拭いた。

嵐の前の静けさだったのかもしれない。何もしないから何か起こることもないだろうと安心感もあった。ただ、それは依來の目には見えない変化で、美咲自身はずっと何かがあった。どこでスイッチが入ったかも解らない。母親のことを思い出すのが原因だろうが、どこで思い出すのが解らない。

依來の細い指先が、美咲の頬に触れ、首筋に流れた。充血した痣が一つ、二つと見え難い箇所があり、胸元に一つ、二つと続く。独占欲を記した気はないが美咲を誰にも触れさせたくない思いは芽生えていた。それが日毎に増してゆき、それに伴って痣はわき腹や肩背中、脚にも増えた。消えかけると重なるように痣を作り、ずっと

消えないように肌に残し続けた。

鎖骨あたりに消えかけの痣を見つけ、依來はそこを指で撫でた。肌理整った艶かしい肌を指が滑り、そっと、離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1178/>

裸の王子さま

2011年12月9日01時55分発行